

---

# ネギま ~ 悪平等《ノットイコール》を名乗りし夜天の王 ~

零崎煌識

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギまノットイコール悪平等を名乗りし夜天の王

### 【Nコード】

N4078T

### 【作者名】

零崎煌識

### 【あらすじ】

女神によって殺された1人の青年。青年は夜天の書とその守護騎士達とともになにをなすのだろうか。

## 第1話（前書き）

処女作のある兄妹の物語がまだ途中ですが・・・よかったら読んでください。

## 第1話

「?????side」

そこは、白く白以外の色がなくまた何もかも無くだが、この世の全てのモノが存在し全ての色がそこには存在するそんな空間の中、1人の青年と1人の女性がいた。青年は何処にでもいる普通の青年だが、女性の方は絶世の美女と言言葉すら彼女を表す言葉としては役不足だと思わせる程の美女がそこには存在した・・・土下座して。

「なるほど。俺は、神であるあんたのミスで死んだって訳か。」

「その通りです。すいませんでしたー！ー！ー！ー！」

「すいませんですむかー！ー！ー！（怒）犯すぞこのアマ！ー！」

「ヒツ。ですから御詫びに何らかの能力を付けて別の世界に転生させます！ー！」

女性は青年に向かって怯えながら言った。

「別の世界？」

「はい。あなたに分かりやすく言うと二次創作の転生ものと同じと考えてもらって構いません。」

「ふーん。で、能力の数の上限は？」

「ステータス的な意味の能力で1つ。無限剣製や王の財宝などの特殊能力で1つ。の計2つと、転生場所の世界と生まれる場所の指定になります。」

「わかった。少し時間をくれ。」

「はい。では、決まりましたら言ってください。」

く考え中く

「おい、決まったぞ。」

「そうですか。では言ってください。」

「ああ。」

青年の決めたのは、

身体能力：戯言シリーズの“橙なる種”・“人類最終” 想影真心  
の身体能力そこから鍛えれば最終的には“人外最終”と呼べるレベルまで行ける身体。

特殊能力：夜天の書。バグなしで、リインフォース？とアギト付きで、リリカルなのはの全ての魔法を記憶済みの状態。

転生場所：世界：ネギま。生まれる場所：原作が始まるまで死なない場所。

「で頼むよ。」

「わかりました。それでは、今から送ります。」

「今すぐですか？」

「はい。」

「わかりました。」

「それと言い忘れてましたが、夜天の書は他の人には貴方が持つていなければ発動するまで他人に認識されません。そしてあなたが5、6歳ぐらいの時に発動します。それまではただの魔法媒体になる本です。また、ネギまの魔法も収集できます。それと、ザフィーラは女性体です。」

「わかった。」

「それでは、行ってらっしゃい。」

「言つて来ます。」

そう言つて青年は消えて行った。

「さて、夜天の書を送ろつと。ってヤバ！転生先間違えてる！でも大丈夫だよな？」

「この後、この女性は「あの時ちゃんと修正していれば。」と後悔する事になる。」

~~~~~side end~~~~~

第1話（後書き）

## 第2話

side

こんにちは。俺はあの駄女神に間違つて殺され能力を貰つて転生したものです。なぜあの女神の事を駄女神と呼ぶかと言うと、あのアマ俺をサウザンド・マスター、ナギ・スプリングフィールドと災厄の女王、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの息子にしてネギ・スプリングフィールドの弟として転生させやがった。しかも、家にあつた夜天の書に「ごめんね」と書かれた紙が挿んであつた。

大体の転生に原作が始まるまで死なない場所て言つたのに何でよりによつて1番死ぬ確立の高そうなネギの弟なんだよ！あれだけ、下手したら4歳とかで死んじゃうかも知れないんだよ！？それに石化されたら半永久的に石像のまんまだし、あれか、俺に死ねと！

あ、そうそう、俺の名前はアスカ・スプリングフィールドです。

そんな訳で俺はこの3、4年間を魔力と気のコントロールと身体強化、認識障害の魔法など兎に角悪魔襲撃から身を守るために費やしました。

そのお陰でと言うか何と言うかネギとは余り仲が良くありません。それにネカネさんとアーニヤはネギにかかりつきりなので余り話さないで自然と魔法の練習する時間が作れました。

「さてと今日の練習は此処までにするか。」

そう言つて俺は家に向かったが村には火の気が上がっていた。

「ちつ、今日が悪魔襲撃の日かよ!」

そう俺は言っただけでも自分の中にある恐怖から目を背けようとは  
がなばった。

「アスカ君!!」

その声に反応して俺は振り返った。

「ココロウア小母さん!これは一体!？」

「悪魔が大量に攻めて来たのよ。急いで逃げなさい!」

「でも、ネカネさん達が!」

「大丈夫よ。ネカネちゃんやアーニヤ達ならスタンさんや他の大  
人が一緒だしね。だから逃げるわよ!」

「はい!」

そう言っただけ俺達は安全な場所まで逃げ様としたが悪魔に見付かっ  
てしまった。

「ドコエイクツモリダニンゲン?」

「なっ!アスカ君逃げなさい!ここは私が何とかするから!」

「何言ってるんですか小母さん!？」

「ナニヲゴチャゴチャイッテイルニンゲンオマエタチハココデオ  
シマイダ。石化!」

そう言っただけ悪魔は石化の魔法を俺に放ちそれを、ココロウア小母  
さんは身を挺して俺を守り自分が代わりに受けた。

「ガハッ!魔法の射手・火の10矢!!」



「なぜだ！」

【石化を解くと死んでしまう人間が居るからよ。】

「なら、俺の考えた異常をくれ。」

【どうして異常なのかしら？別に石化を解く能力でも良いんじゃないの？】

「それだと、お前の言う死んでしまう人間が出るだろ。それに、この先に起こるかもしれない理不尽なことに打ち勝つ為には俺の考えた異常が必要だからな。」

【わかったわ。それでどんなのかしら？】

「名前は創造幻想<sup>スキルメーカー</sup>。ありとあらゆる異常、過負荷を作ることが出来る能力だ。」

【な！それは強すぎるわ！】

「どんなものでも良いんだろ？」

【わかったわ。その代り使えば使うほど寿命が短くなるわ。ただし、不老か、不老不死になれば幾らでも使えるわ。】

「わかったそれで良い。」

【じゃあ、あげるわ。ただあげた後貴方は気絶するわ。】

「どうしてだ？」

【異常を完全に貴方の能力とするためよ。】  
「わかった。」

【それじゃね。最後にこれだけは言っておくは御免なさい。】

その言葉を聞いた瞬間俺の意識は落ちた。

＼アスカ side end＼

## 第2話（後書き）

なんか最後の方が適当な感じが否めませんが気にしないでください。

それとこの物語は作者のオリジナルの異常や過負荷が多々です。

### 第3話（前書き）

守護騎士達の喋り方が違つかも知れませんがご了承ください。

### 第3話

（アスカ side）

悪魔襲撃から数ヶ月が経った。

俺は眼を覚ました後、アーニヤにココロウア小母さんの遺言を伝えた。アーニヤは、「なんでお母さんが石化してアンタが生き残ってるの！アンタが石化すれば良かったのに！！」と言い放ち直ぐにしまったと言う様な顔をして走り出した。

その後、俺は、ネギとアーニヤとは折り合いが悪く、お互いに関り合おうとしなかったし、入学したメルディアナ魔法学校でも俺は魔力の殆どを封印していてそのせいで魔力が少ないとされイジメにあっていた。イジメの内容もネカネ達には知られない様にイジメル側が隠したお陰でその事は露呈されなかった。

そして俺は6歳になるまで女神に貰った異常、スキルメーカー創造幻想で、めだかボックスに出て来る異常と過負荷とオリジナルの異常と過負荷を作った。その結果俺は、20歳代になる頃には死んでしまう程の寿命になった。

今日いや、後20秒で俺は6歳になります。

「9・8・7・6・5・4・3・2・1・0！午前0時になった。」

僕が机の上にある夜天の書をベットから見ながらカウントダウンを終えると、机の上にあった夜天の書が浮かびそして光りだし、本

を縛っていた鎖が千切れた。

『封印を解除します。』

そして夜天の書が俺の元に下りてきて、

『起動。』

その言葉と共に4人の守護騎士が現れた。  
最初にシグナムが、

「夜天の書の起動を確認しました。」

次にシャマルが、

「我ら、夜天の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にございます。」

┌

そしてザフィーラが

「夜天の主の元に集いし雲。」

最後にヴィータが

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を。」

と言って現れた。ちなみにザフィーラは女神の言っていたとおり  
女性体で体型はアルフと同じだった。

「ん。俺の名前はアスカ・スプリングフィールド。アスカって呼

んでくれ。よろしくな、守護騎士の皆。」

俺が自己紹介すると、

「私は烈火の将、剣の騎士シグナム。」

「私は紅の鉄騎、鉄槌の騎士ヴィータ。」

「私は風の癒し手、湖の騎士シヤマル。」

「私は蒼き狼、盾の守護獣ザフィーラ。」

「……よろしくお願ひします。」「」「」

俺が何か言う前にシグナムが、

「それで主アスカ私達は何をすれば良いのでしょうか？」

守護騎士全員が俺からの命令を待っていた。

「夜天の書を完成させる。」

「分かりました。では夜天の書完成のため収集活動をしてきます。」

「

シグナムの言葉に俺は、

「いや、それには及ばないよ。」

と言い、それに対してシヤマルが聞き返してきた。

「如何いうことですかアスカ君？」

「だって、俺の魔力で事足りるからね。」

俺の発言に守護騎士全員が驚いた。

「本当ですか！主アスカ！」

「本当だよ。夜天の書よ俺の魔力を収集せよ！」

『収集。』

夜天の書は俺の命令で俺の魔力を収集し始め666ページ全てを俺の魔力でうめた。

「凄い。」

「スゲー。」

「アスカ君貴方は一体。」

「何言ってるんだシャマル、俺は夜天の王だぜ。」

「とそれよりもっと。夜天の主の名の下に、我が融合騎を此処に。」

俺の言葉に夜天の書は反応した。

「管制プログラム此処に。」

「ん。夜天の主の名において、我が夜天の書の管制プログラムにして、我が融合騎に名を贈ろう。強く支える者、幸運の風、祝福のエアール、『リインフォース』。」

「名称『リインフォース』認識、管理者権限が使用可能になりました。」

「よろしくな。リインフォース。」

「はい。我が主。」

「次につと。シグナムとヴィータに融合騎をあげよう。」

「私達にですか？」

「ん。もしかしていらぬ？」

俺の問いにシグナムとヴィータは、

「います。」

「いる！」

と答えた。

「じゃ始めるか。管理者権限発動。収納領域に封印されているユニゾンデバイスと予備管制プログラムを此処に。」

俺がそう言うのと俺等の前に2人のユニゾンデバイスが現れた。

「おはようございます。」

「ん。おはよう2人とも早速だけど君達に名前を贈ろう。予備管制プログラムの君は、『リインフォース・ツヴァイ』、赤髪の封印されていたユニゾンデバイスの君は、『アギト』だ。それで、ツヴァイはヴィータの、アギトはシグナムのユニゾンデバイスだ。」

「アンタがあたしの相棒かよろしくなシグナム！」

「よろしく頼む、アギト。」

「私は、リインフォース・ツヴァイです。よろしくです、ヴィータちゃん！」

「よろしくな、リイン。」

「それと、リインフォース。リインフォースが2人じゃ混乱するから君の事はツヴァイがいるからアインって呼ぶことにするよ。いいかい？」

「構いません主。」

リインフォースはそう答えた。

「次は、皆の騎士甲冑だな。」

俺はそう言い、リリカルなのはの原作と同じ騎士甲冑を皆に与えた。

「これで良いな。じゃ、改めてよろしくな、皆!」  
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

こうして、俺は夜天の王となった。

＼アスカ side end＼

### 第3話（後書き）

第3話でした。

この作品の夜天の書はリリカルなのは世界の夜天の書と違って  
来た歴史と存在する歳月が違うという設定です。

## 設定1（前書き）

アスカと守護騎士達の設定です。  
少し付け足しました。

## 設定 1

名前：アスカ・スプリングフィールド

顔：アリカを幼くした感じ。

身長：135cm

体重：36kg

ステータス

筋力：B

耐久：A

俊敏：A

魔力：SSS+（守護騎士達を召喚するまでは一時的にEX-だった。アインとユニゾンすることによって擬似的なEXになれる。）

気：SS+（原作開始時から<sup>デッドロック</sup>死延足を使って不老不死の為EX）

幸運：B

能力欄：

・<sup>スキルメーカー</sup>創造幻想

ありとあらゆる異常、過負荷を作ることが出来る。

・<sup>スキルメーカー</sup>創造幻想で作った異常、過負荷

めだかボックスの全異常と過負荷、例えば<sup>デッドロック</sup>死延足や<sup>ジエンド</sup>完成など。そ

れとオリジナルの全異常と過負荷。

オリジナルの異常と過負荷

・活動吸収エナジードレイン・・・触れたモノの力（魔力、気、妖力、神力、e t

c）を自分のモノに出来る。

タイムレコード

・記憶探査・・・刀語の真庭忍法記録辿りと同じく、石や机、刀などの無生物が持つ「記録」を読むことが出来る。それに付け加え、触った生物の記憶も読み取れる異常。

ネットラリアリ

・電子制御・・・電子機器（リリカルなのはデバイスなども含む）の全てをコントロールできる異常。

ウォーターコントロール

・水遊び・・・普通の水から血液などのありとあらゆる水分を操ることが出来る。また水の上を歩くこともできるスキル。

・絶対交渉・・・どんな交渉だろうと自分の望むとうりに交渉できる異常。

チェンジング

・物々交換・・・効果は口写し（リップサービス）と同じ。異常や過負荷に与えるスキル。ただしその際相手から何かスキルか才能を受け取らなければならず、返して貰う際には貸した時と同じ条件でないといけない。

オルティナティブ

・代行体・・・任意で他人に自分の罪（殺人や暴行など）や怪我や痛みを押し付ける。また、体に乗っ取る事も出来る過負荷。

ロンド

・輪廻・・・死んだ後、任意で発動させる能力で自分の望む条件の肉体に生前の能力と武器を持って転生できる。

ファントムベイン

・残像痛覚・・・相手の痛みとその痛みの原因の映像を見せ続ける過負荷。ただ、致死武器と違い、嫌な記憶だけとか傷だけ開くとか建物などの無生物にも作用するとかは出来ない。

ダブルゲンガイ

・肉体変化・・・自分の肉体を自由に変形できるスキル。ただし見た目が変わるだけで身体能力の増減はしない。

武器欄：

・夜天の書

リリカルなのはに出て来る全ての魔法（アルカンシエルを含む）  
が使える。収納領域はかなりの収納量を誇り、ネギまのダイオラマ  
魔法球（女神仕様）とリリカルなのはに出て来るロストロギアや次  
元航行艦なども入っている。また、女神が手を加えたので魔法伝導  
率と耐久性が高く、原作のリリカルなのはの夜天の書より超高性能  
な仕上がりになっている。

・騎士杖・剣十字シュベルトクロイツ

女神が手を加えたモノでどんな魔法具よりも魔法伝導率が良く1  
級の宝具並みの耐久性を誇る。また、接近戦の魔法を行使する際は  
十字剣に変形したりする。

備考：

イジメを受けていてその傷などを全て他の誰か（イジメをしてい  
た奴や、黙認していた奴）エンカウンターに不慮の事故で押し付けていた。

守護騎士達をととても大切にしている。分かりやすく表すと、守護  
騎士達 > > > 頑張れば越えられる壁 > アーニヤの母親、スタン >  
ネカネ > 誇り有る悪の魔法使いと言われるエヴァンジェリン > >  
越えられない壁 > > > アリカ > ネギ、アーニヤ > > 石化した村の  
人たち > 知らない他人、ナギ > > > > > > > > > 2回生まれ変わっ  
ても越えられない壁 > > > 正義の魔法使い≠違法魔法犯罪者 > > >  
> > 性犯罪者。見たいな感じです。ナギよりアリカが上なのは母親  
だからです。

考え方が若干安心院さんに似て、自分と守護騎士達を除く人間は  
皆平等に肩ばっかりだと考えている。

王家の魔力が使える擬似魔力無効化体質になれる。

アイン、ツヴァイ、アギトの3人と同時ユニゾンが出来、ユニゾ  
ンするライフメーカーと造物主よりももっと完成度の高い世界を創る事が出来る。

3人でのユニゾンをすると、1カ月半間意識不明になり、その後意  
識を取り戻し、そこから9ヶ月のリハビリをする事によって、3人

でのユニゾンする前の状態に戻ることが出来る。

ステータスは、身体能力が人類最終、最終的には人外最終になれるスペックをもっているので総じて高め。

別荘の中にある家の倉庫には女神が入れた色々なモノが入っている。

過負荷のスキルを使いすぎて思考が悪平等ではなく過負荷よりになっっている。

名前：リインフォース・アイン

見た目：リリカルなのはの原作通り

ステータス

筋力：A A

耐久：A A +

俊敏：A +

魔力：S S S -

幸運：B

能力：

・ユニゾン

アスカとユニゾンできる。その時の適合率は100%でこれは女神の計らいでそうだった。

・蒐集行使

夜天の書が保有・蒐集した膨大な数の魔法の使用方法をマニュアル化し、リインフォースが利用できるようにするスキル。また、マニュアル化の際にアスカにも使い易い様になっている。

備考：

アスカにかなりの好意を持っている。また、原作開始時にはその好意もカンストしていて、アスカ絶対至上主義者の1人になる予定。

名前：シグナム

見た目：リリカルなのはの原作通り

ステータス

筋力：A A A -

耐久：A +

俊敏：S -

魔力：S S S

幸運：B

武器：

・炎の魔剣レヴァンティン

剣型のデバイスでこれも女神によって強化されている。

備考：

アスカに好意を抱いている。シグナムもまた、原作開始時にはその好意がカンストしていて、アスカ絶対至上主義者の1人になる予定。

名前：アギト

見た目：リリカルなのはの原作通り

ステータス

筋力：C

耐久：A+

俊敏：S

魔力：SS

幸運：B

能力：

ユニゾン

シグナムとアスカとユニゾンできる。また、適合率はどちらも100%である。

備考：

ツヴァイをからかって遊ぶのが好き。

アスカに好意を抱いている。原作開始時にはその好意はカンストしていないが、アスカ至上主義者の1人になる予定。

名前：ヴィータ  
見た目：リリカルなのはの原作通りだが、胸が原作より多少ある。

ステータス

筋力：A A

耐久：A A +

俊敏：S

魔力：S S S

幸運：B

武器：

・鉄くろがねの伯爵グラーファイゼン  
ハンマー型のデバイスで女神印。

備考

アスカに好意を抱いている。ヴィータもまた、原作開始時にはその好意がカンストしていて、アスカ絶対至上主義者の1人になる予定。

名前：リインフォース・ツヴァイ

見た目：リリカルなのは原作通り

ステータス

筋力：C

耐久：A+

俊敏：S

魔力：SS

幸運：B

武器：

・蒼天の書

魔道書型のデバイスでアスカの夜天の書には遠く及ばないがそれでも超高性能。

能力：

ユニゾン

ヴィータとアスカとユニゾンできる。また、適合率はどちらも100%である。

備考

アギトにいつもからかわれている。  
アスカに好意を抱いている。原作開始時にはその好意がカンスト

はしていないが、皆で一緒に居られたら良いと思っているアスカ至上主義者の1人になる予定。

名前：シヤマル

見た目：リリカルなのはの原作通り

ステータス

筋力：A

耐久：A+

俊敏：AAA

魔力：SSS

幸運：B

武器：

・風のリングクラーウルヴィント

補助機能に特化したペンデュラム（振り子）型のデバイスで女神印。

備考：

リリカルなのはの原作とは違い料理の腕は1流になっている。理由は女神が夜天の書のバグを直す時、シヤマルの料理の下手さをバグとして直し、そして本人の努力の結果1流の腕前にまで成長した。

めだかボックスの<sup>ひとよし</sup>人吉 <sup>ひとみ</sup>瞳の使っていた「<sup>マザー</sup>お母さんのたしなみ」  
が何故か使えそれと補助魔法を使い戦闘をする。  
アスカに好意を抱いている。シャマルもまた、原作開始時にはその好意がカンストしていて、アスカ絶対至上主義者の1人になる予定。

名前：ザフィーラ

見た目：アルフの髪や眼、肌の色をリリカルなのは原作のザフィーラと同じにした感じ。

ステータス

筋力：A A A +

耐久：S S +

俊敏：S

魔力：S S S

幸運：B

武器：

・籠手

デバイスでは無いが女神印なのでかなり頑丈。

備考

この作品のザフィーラは初めから女性体で創られたという設定に

なっている。

色々な武術を習得済みで格闘技術がやたら高い。

アスカに好意を抱いている。ザフィーラもまた、原作開始時にはその好意がコンストしていて、アスカ絶対至上主義者の1人になる予定。

## 設定1（後書き）

守護騎士達はアスカのハーレムになる予定です。

この設定には書いてないオリジナルの異常と過負荷も出します。

## 第4話

「アスカ side」

守護騎士達が俺の元に現れて3年以上が経ち、俺は20歳になった。

え？年齢計算が合わないって？それは、夜天の書の収納領域に入っていた駄女神特性のダイオラマ魔法球（これからは別荘とよぶ）を使って守護騎士達と戦闘訓練などをしていたからだ。それにこの別荘は中がトリコの世界の生物がウヨウヨ居て戦う相手や食べる食材に苦労しないし、捕まえた生物の調理の仕方が書かれた本や生物を調理する調理器具が一通り揃っていると一言う一品だった。

そんな感じで俺は学校のはずれに家をログハウスを建てそこで守護騎士達と暮らしながら生活をしていた。

その間紅き翼の高畑が俺やネギに接触してきたが、高畑は俺やネギを通してナギ達を見ていたのでそれからは殆ど顔を合わせずに別荘や家で守護騎士達とイチャイチャしていた。合わなくなる様になると今度は俺の家に来ようとしたが、シャマルの結界によって家に来れなくだんねんしたようだった。

そんな感じで守護騎士達の好意がカンスト気味の今日この頃、俺はメルディアナ魔法学校を卒業します。

「卒業証書授与 この七年間良く頑張ってきた。だがこれから  
の修業が本番だ気を抜くでないぞ。」

アスカ・スプリングフィールド君。」

「はい。」

俺の名前が呼ばれるとあっちこっちから

「オイあれが。」

「ああ、親の七光りで卒業かよ。」

とか色々な声が聞こえた。

ちなみに今の僕の姿は10歳位で身長は143?位にしてあります。

卒業式が終わった後、卒業課題を見て直ぐに俺は家に帰ろうとして、校長に呼ばれている事を思い出し校長室へ向かった。

校長室に着くと中から声が聞こえてきたが俺はそれを無視しノックをして、

コンコン

「失礼します。アスカです。」

校長の返事を待たず中に入った。

「お。来たかアスカ。」

「それで校長何のようですか?」

「うむ。お前の卒業課題は何じゃった?」

「日本で教師をすること。ですが?」

「そうか。それは大変じゃのう。」

「そうですね。この課題を見たとき正直、貴方の頭が湧いているのかと思いましたよ。」

「サラリと毒をはくのお、アスカ。じゃが決定事項じゃ、最早覆らぬ。故に行つてこい。そして立派な魔法使いマギステル・マギになってくるのじゃ。

「遠慮しますよ校長。」

「なにを遠慮するのじゃ？」

「立派な魔法使いとかいうごみ屑以下の称号をですよ。」

俺の言葉にさっきまで黙っていたネギが、

「何てこと言うんだよアスカ!？」

とやって来た。

「五月蠅いなあ。本当の事じゃないか。」

「本当って如何いう意味なのさ!？」

「そんなの自分で考えれば?それで、校長、用はこれだけですか?。」

「うむ、そうじゃが?。」

「そうですね。あ、それと俺は、11月までには向こうに行きますから、修行先に連絡をよろしく願いますよ。」

「そんなに早く行ってどうするのじゃ?。」

「俺は日本語が出来ますが、日本語が出来るといっても完璧じゃ有りませんから、早く向こうに行って慣れておこうと思ってね。」

「そうか。わかった。先方にはその様に伝えておこう。」

「ありがとうございます。それでは失礼します。」

そうやって俺が出て行こうとすると、

「まってアスカ!。」

そうやってネカネ姉さんが止めてきました。

「なんですかネカネ姉さん？」

「私達と少し話をしましょう？」

「結構です。貴方たちと話すことなんてありませんから。」

そう言って立ち去ろうとする俺をアーニヤが止める。

「待ちなさいよ！ネカネさんが話そうって言ってるのよ！」

「それが如何したんですか？」

「アンタ！！」

そう言って俺に突っ掛かって来ようとするアーニヤに、

『跪け！』

と、言葉の重みを使いアーニヤとネカネ姉さんたちを跪かせた。

「これは何なのじゃアスカ！？」

校長の問いに、

「これは、言葉の重みって言って、皆俺の言葉に重みを感じているんだよ。」

「アスカ、オ又シまさか力を隠しておったのか？」

「さあ、どうだろうね。俺はもう帰るよ。それと、忘れてたけど先方に俺名義で8人ぐらい軽く住めるような物件を頼んどいてよ。

お金はそっちに着いた時に払うからって。』んじゃ。また明日とか  
「！』」

そう言って、俺は最後に球磨川袂の用に括弧を付けて挨拶をし校長室を出て行った。

アスカ side ends

## 第4話（後書き）

早くも魔法学校卒業です。

執筆が土日バイトを始めたので、平日の大学の終わった後やバイトの終わった後になるし、もう一つ話を書いている関係上更新はまちまちになる事をご了承ください。

## 第5話

↳ 第三者 side

麻帆良学園女子中等部の学園長室でとある資料を読んで話している2人の人物がいた。

「ふむ。ネギ君は優秀じゃがアスカ君はのお。高畑君から見た二人はどうじゃった？」

「そうですね学園長、僕が見たときはアスカ君の方が優秀そうに見えましたけど。この報告書を見る限りでは一般教養と魔法薬はトップでその他の魔法関連は中の下位ですね。」

「そうじゃのお。じゃが、向ここの校長はアスカ君は力を隠しておったといっておたしのう。」

近衛門達はメルディアナ魔法学校の校長の言っていた言葉が報告書と違っている事に疑問を感じていた。

「それにじゃ、アスカ君は8人以上が住める物件を探しているそうじゃ。」

「8人以上ですか。」

「うむ。それでの高畑君、君の知っている限りでアスカ君にパートナーはいたかの？」

「いえ、僕はほとんどアスカ君と親交がありませんでしたから、パートナーの存在はちよつとわからないです。」

「そうか。」

近衛門と高畑は報告書と睨めっこしながら話し合っていた。

～第三者 side end～

～アスカ side～

卒業して3週間俺はニートもとい、自宅警備員と化そうとしていたので事前に校長に連絡して修行先である麻帆良に向かうことにした。

アイン以外の守護騎士たちには夜天の書に戻ってもらい、アインを保護者として空港に行った。

本当ならみんな夜天の書に戻ってもらい1人で乗って行こうと思っただけどみんな戻らず一緒に飛行機に乗って行こうとしたのを何とか1人だけ戻らなくてよいという条件までに持込みこの形に落ち着いた。

俺とアインがターミナルから移動しようとする時、

「アスカ！」

と後ろから声がするので振り返るとネカネ姉さんがいた。

「へえ～。あんな事があつたのに俺のところによくこれたね？」

「アスカ。」

「で、何の用？俺もう行かなくちゃイケないんだけど？」

「アスカ、その人は？」

ネカネ姉さんはアインを指さして聞いた。

「ああ、この子は俺のパートナーだよ。」

「いつのまに。」

「ん？かれこれ、3年以上は経ってるかな。それで、そんな事聞きにごまで来たの？」

「違うわ！校長からアスカが今日出発するって聞いたから身をくりと校長からこれを渡すようにって頼まれたの。」

そう言つて、ネカネ姉さんは箱を渡してきた。

「それは、ネギの持っている杖と同じランクの魔法媒体よ。」  
「ふーん。使わないけど貰つとくか。」

そう言つて俺は箱を開け中の指輪型の魔法媒体を確認して影の中に入れた。

「アスカ、使わないってどういう事なの？」

「だってこれよりも良い魔法媒体持つてるからな。つと、もう飛行機的时间だな。じゃあな、ネカネ姉さん。」

そう言つて俺とアインは乗り場に向かおうとした。

「アスカまつて！」

「何ですか？」

「アスカは私やネギ、アーニヤの事どう思っているの？」

その問いに俺は球磨川の用に括弧をつけて答えた。

『別に何とも。ネカネ姉さんとネギは、血のつながった他人。アーニヤは俺を守ったココロウア小母さんの娘という認識だけ。』

『あー！ひよつとして勘違いしてる？』

『僕が君たちを家族と思ってるのか！』

『うわ、恥ずかしー。』

『自意識過剰ー。』

『どっだけ自己中心的な考えしてんのネカネ姉さん達は！』

『自分達のことそーんな重要人物だと思いながら日々を生きてるんだおもしろーい。』

俺の答えに少しでも希望を持っていたらしいネカネ姉さんは絶望したような顔をした。

そんな顔を見無視して、俺とアインは乗り場に向かった。

『んじゃ。』

『また今度とか！』

＼アスカ side end＼

## 第5話（後書き）

面白かったと感想を貰い、作者はかなり嬉しかったです。

頑張りますのでこれからも温かく見守ってください。

## 第6話（前書き）

アスカのしゃべりがこれから殆ど球磨川喋りです。

少し会話が噛み合ってなさげな所があるかも知れません。

## 第6話

↳ 第三者 side

アスカ達は麻帆良に着き、待ち合わせの場所で待っていた。

「ねえ、アイン。」

「なんですか？主。」

「うん。俺はこれから、球磨川みたいに出来るだけ括弧を付けて話すことにしようと思うんだ。」

「いきなりどうしたんですか？何故あえて球磨川なのですか？安心院みたくても良いのではないですか？」

「うん。考え方としては俺は安心院に近いけどさ、球磨川の方が個性があるじゃない？だからだよ。」

「そうですか。主が決めた事ならよいです。」

「うん。ありがとう！」

「ですが、私たちの前では出来るだけ括弧を外して、括弧なしで格好付けずに話してください。」

「わかったよ。」

「なら良いのです。」

こうしてアスカは出来るだけ括弧を付けるという個性？を付ける事にした。

そんな話をし終わると、1人の人がこちらに向かってきた。

「またせたかな？」

『いえ、全然待つてませんよ。』

「そうかい。ところで、そちらの人は？」

『ああ、彼女ですか？彼女は僕の奥さんですよ。』

「奥さん?!」

『まあ、嘘ですけど。あは、もしかして信じちゃいました?』

「いや、少し吃驚したただだよ。」

『そうですね。こんなバレバレな嘘引つかかるわけ無いですよね。』

「ああ、そうだね。えっと、僕は高畑・T・タカミチっていうます。よろしくお願いします。」

「私は、リインフォース・アイン・・・主、姓は如何しましょう?」

『うん。姓は、夜天で良いんじゃないか?またはスカイナイトとか。』

「そうですね。では改めて、私は主アスカ・スプリングフィールドの従者でリインフォース・アイン・スカイナイトと言います。」

「アスカ君従者が居たのかい?」  
『ええ。それよりも行きませんか?』

こうしてアスカ達は高畑の先導で学園長室に向かった。

コン、コン。

「高畑です。アスカ君達を連れてきました。」

「うむ。入って良いぞい。」

「失礼します。」

『失礼しまーす!』

「失礼します。」

そう言っアスカ達は学園長室に入って行った。

「うむ。まあ座りなさい。わしはこの麻帆良学園の学園長、近衛  
近右衛門じゃ。」

『うわゝ。高畑さん。僕初めて見ました。あれが日本の妖怪で妖怪の総大将であると勘違いされたイメージを持つ、ぬらりひよんでしょっ?』

『この学園は妖怪が運営しているんですか?』

『ちがうわい! わしは列記とした人間、ヒューマンじゃ!』

『ははは。冗談はその頭だけにしてくださいよ。』

『アスカ君。学園長はれっきとした人間だよ。』

『そうなんですか? では、学園長失礼しました。』

『いや、わかつてくれれば良いんじゃないよ。それで、アスカ君の横にいる女性はどなたかの?』

『ああ、彼女は僕の従者ですよ。』

『私は、私はアスカ様の従者でリインフォース・アイン・スカイナイトと言います。』

『そうかの。よろしくの。』

『ええ、こちらこそ。』

『それじゃ。早速じゃが……。』

近右衛門が言おうとした言葉に被せるように、

『話をする前に近衛学園長』

『催促するようで申し訳ありませんが』

『お茶をください』

『今すぐに』

『なにぶんここに来るまで秋だというのに随分日差しが強かったから』

『のど』

『渴いていました。』

とアスカが言った。

「……これは気の利かないことで失礼した。」

「学園長。僕が淹れてきますよ。」

「ありがとうございますっ。」

「僕は日本茶でかまませんよ。」

「リインフォースさんは？」

「私は主と同じものでかまいません。」

「わかりました。」

そう言っ て高畑はお茶を淹れに行っ た。

「はいどうぞ。」

そう言っ て高畑は人数分のお茶を出した。

『「ありがとうございます。」』

アスカとリインは高畑にお礼を言いお茶を飲んだ。

『んっ』

『おいしっ。』

「それでじゃ、アスカ君。君の課題である教師の仕事は数学を担当して貰いたいのじゃが。」

『問題ありませんよ。』

『ただ、教師の仕事をする前に生徒として他の教師の方の授業を受け、さらに少しの間で良いので誰か一般人の先生の下で研修をさせてください。』

「ふお。どうしてそんな面倒なことを？」

『先生とは先に生きていると書きますが生憎、僕の教える方たちより僕の方が年下になるのでしょうからせめて勉強を教えるのだけはちゃんとしたですから、面倒でもなんでもするんですよ。』

「わかった。その様になる様取り計ろう。それと言っていた家じやが……。」

「見つかりませんでしたか？」

「いや見つかるには見つかったのじやがな。その家は麻帆良荘という元アパートなのじやがそれで良いかの？」

「別に構いませんよ。でも中とか改装しても良いですか？」

「別に構わぬよ。おぬし達のものじやからな。」

「分かりました。」

そうしてアス力は買取契約の書類を書いた。そしてその近隣の地図を買った。

「それじゃあ、僕達は行きますね。」

「待つてくれんかの？」

「如何したんですか？」

「アス力君に聞きたいことがあるんじやが。」

「なんですか？」

「アス力君はあちらの学校に通ってる時、力を隠していたそうじやが。どうしてじや？」

「えー」

「理由？」

「理由ですかー？」

「弱りましたねえ」

「あ、そうだ！」

「あちらの学校の魔法教師の誰かに両親を殺されたからってどうですか？」

「実の妹が魔法使いに攫われたからとかー」

「あつ！でも僕に妹はいないからなあ」

「そこは兄にしますよ」

「親友だと信じていた魔法使いに裏切られたっていうのも萌えま

すよねー」

「んー？どれにするか迷うなあ。」

「理由は無いのかの？」

「そうですね、自称正義の魔法使い達を抹殺する為ですかねー。」

「抹殺とはどおゆう意味かな、アス力君？」

「あはっ」

「やだなあ」

「意味も何もそのまんまの意味ですが？」

「高畑さん、近衛学園長。」

「この世界に巢喰う自称正義の魔法使いを一人残らず抹殺します」

「僕はそのためにこれまで落ちこぼれのフリをしてきました」

「だってあいつら」

「鬱陶しいし、気持ち悪いでしょ？」

「どうしてそうしようと思ったのかな？」

「だってあいつ等、年がら年中、正義正義正義五月蠅いし。」

「悪いことしても正義の為に仕方が無かったとかとか言うし」

「だから僕は自称正義の魔法使いという元老院の犬どもを抹殺す

るんですよ。」

「……………そ、そんな事が出来るわけ……………！」

そう言っつて近右衛門は身を動かした。

「できますよ」

「僕は」

「昔からそれだけを生き甲斐にしてきた男です。」

「現に前の学校で何人か先生が辞めたりしてるでしょ？」

アス力の発言に高畑と近右衛門は驚いた。

「なっ！あれは君がやったのか！？」

『ええ。だからこの学園でも同じことをしますよ。』

「な！そんな事が許されるはず無いじゃろ！出来るかどうかという問題じゃ無い！そ、そんな事されれば警備の人数が減り、図書館島や一般の生徒などに被害が出てしまふ！？わしの目の黒いうちはそんな真似」

言おうとした近右衛門と同じ意見だと言わんばかりにそれを見ていた高畑の上半身に大きな螺子が刺さった。

「！！」

『へーえ』

『じゃ』

『おめめを白黒させてもらおうかな』

『パンダみたいに！』

『老人や両親の仲間なら攻撃されないと思った？』

『黒幕や強者ぶっていれば安全だと思った？』

『僕が可愛らしい顔立ちだからおしゃべりの最中なら死なないと思っただ？』

アスカは螺子を持ち高畑達に近づきながらいった。

ちなみにリインは今までののをお茶を継ぎ足しながら傍観していた。

『甘えよ。』

そう言って高畑と近右衛門の顔面に蹴りで螺子を打ち込んだ。

「はっ！？」

『……が』

『その甘さ』

『嫌いじゃあないぜ』

アスカのその言葉の最中も近右衛門たちは今起こった事に困惑していた。

アスカは座り続きを言った。

『心配しないでくださいよ学園長に高畑さん』

『あなた達の事はとりあえず最後にしてあげますから。』

『そうですね。僕達に手出しをしない限り自称正義の魔法使い以外は手出ししない事を誓いますよ。』

『なんなら契約書でも書きましようか？』

『僕の敵は自称正義の魔法使いという元老院の犬と元老院だけです。』

『だから、卒業課題には本当に感謝してます。』

『こんな敵自称正義の魔法使いだらけの箱庭に僕を招待してくれたことを！』

「……………」

『ま、見てください。』

『あなた達自称正義の魔法使いの元老院の犬共を』

『僕と僕の従者達が螺子伏せてあげますから』

そう言ってアスカは立ち上がり出て行きながら言った。

『あはっ』

『とはいえ抵抗も無くヤツてしまうのは味気ないから近い内に自

称正義の魔法使いが集っている時にでも宣戦布告しに行きますよ。』

『んじゃ』

『また明日とか！』

「失礼します。」

そう言ってアスカとリインは学園長室から出て行った。

アスカ達が出て行った後近右衛門たちは、

「大変なものを呼び入れてしまったかもしれないのお。」  
「そうですね。アス力君があそこまで正義の魔法使いを敵視してるなんて。」

「高畑君。君ならアス力君達に勝てるかの？」

「無理ですね。あの螺子の攻撃が避けられませんでしたから。強さならもしかしたらナギさん達に匹敵するかも知れません。」

「そこまでのか?!」

「はい。」

「は。あ。如何したものが。」

近右衛門と高畑は溜め息をついて考えた。

〜第三者 side end〜

## 第6話（後書き）

アスカの喋っている所の殆どが、めだかボックスの球磨川の言った言葉をパクッたものになってしまった。

直したりしないけど反省しているのでどうか批判しないでください。

## 第7話（前書き）

なんか変な感じになってしまいました。それでも良ければ読んでください。

指摘され“なるほど”と思ったので少し削除しました。

## 第7話

「アスカside」

学園長達に宣戦布告した後、俺とアインは学園長に用意してもらった家に地図を見ながら向かった。

「へえ〜。かなりぼろいと思っていただけそうでもないな。」

「そうですね。どちらかと言うと趣きがある雰囲気古さですね。」

学園長が用意した家はセキレイの出雲荘見たいな外観のアパートだった。

「じゃあ。中に入るか。」

「はい。」

そう言って中に入ると中も外観通りのものだった。

「中も少し埃とか在るけど普通に綺麗だな。」

「そうですね。このアパート結構前に無人になったような言い方でしたが少し埃が落ちている程度ですね。」

「たぶん学園長が経費で掃除させたりぼろい所を直させたりしたんだろうよ。」

「そうですね。」

「それより、みんなを出すか。アイン結界を頼む。」

「わかりました主。」

そう言ってアインは家を覆うように認識阻害と魔力隠蔽の効果の

ある結界を張った。

「主。用意出来ました。」

「うん。ありがとう。じゃあ、始めるか。」

そう言ってアスカは夜天の書を開いた。

「リンカーコア装填。我は夜天の書の主アスカ・スプリングファイールド。」

我が呼びかけに騎士の契約の元、我の前に集え我が愛しき騎士達よ！！」

そうすると、俺の足元にベルカの魔法陣が現れ、俺を囲う様にシグナム達が現れた。

最初にシグナムが、

「夜天の書の守護騎士システムの起動を確認しました。」

そしてザフィーラが

「夜天の主の元に集いし雲。」

次にシャマルが、

「我ら、夜天の王を護る守護騎士。」

最後にヴィータが

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を。」

その言葉を聞いて、

「うん。またよろしくねみんな。」

「……………はい!」「……………」

「早速で悪いんだけど、この家の掃除をして家具とか必要なものを置こうか。」

そう言っただけは掃除を開始した。

「アスカ side end」

「千雨 side」

私は今日発売の漫画とCDと切らしていたシャー芯を買いに外に出た。

私は外に出るのが余り好きではない。だって外に出ると行く先々で“異常”な光景を見てしまうからだ。

「漫画にCD、シャー芯も買ったしさっさと帰るか。」

そう言っただけで青になった横断歩道を渡っていると

プ……………!!

とクラクションを鳴らしてトラックが突っ込んできた。私は目を瞑って「あ、死んだな。」と何故か冷静に考えていた。だけど私はフワッと浮いたかと思うとトラックの進行方向から外れていた。

「え?」



「大丈夫です。」

『そう。本当に怪我とかない？それと何で年下に敬語？』

そう俺が訊いて千雨が答えようとしたとき、トラックから運転手が降りてきた。

「おっと。ゴメンよ嬢ちゃん怪我は無い様だな。がははは、運が  
良いね嬢ちゃん！」

とまったく悪びれた様子も無く運転手は謝った。

「なっ！」

俺は運転手が悪びれた様子も無かった事にイラツとして千雨が怒鳴ろうとしているのを止め、運転手の心を折る事にした。

『ねえ。』

『おじさん。』

『人を殺しかけてたつてのに全然悪びれた様子も無いのは、死んでないから謝れば如何にでもなるって思ってるからなのかな？』

『駄目ですよ〜ちゃんと自分が犯そうとした罪を見つめなきゃ。』

『情けなくて、みっともなく、恥ずかしい。なーんにもできない、役立たずの弱い奴』

『なのに、四天王で言えば3番目に登場しそうな風格があるんですから（笑）』

運転手が何か言う前に俺は、

『あ、ところで』

『話は変わりますが、あなたの大切な人達は元気ですか？』

そう訊き答える様に絶対交渉のスキルを応用して使つと運転手は答えた。

「なっ！お前、京子と健夫をしっているのか・・・っ？」

『いや、全然』

『僕は貴方の名前すら知りませんよ』

『でも、ふうーん』

『貴方の大切な人は京子と健夫っていうんだ』

『おぼえとこーっ』

「・・・！」

運転手は呆気に取られていた。

『あつ、そうだ』

『今回のこの事は貴方には迷惑をかけない様に』

『貴方の大切な人が同じ名前の人に何かをして晴らすとするね。』

『あつ、でも安心してください』

『暴力なんて振るいませんよ。』

『まあ、不慮の事故で大変な目に遭うかも知れませんが。』

そう言いもつと続けようとしたが、

「おい、そのくらいにしとけ。」

と千雨に止められた。

『えー。僕はただ貴方の代わりにやってるだけなのに。』

「良いから来い！」

そう言って千雨は俺を引つ張って場所を移そうとした。  
俺はされるままになり、去り際に運転手に致死武器スカーレットを発動させ軽いトラウマを思い出させた。

場所を人気の無い公園に移した。

「で、どうしてあんな事をしたんだ？」

『あんな事？』

「運転手に色々言ってた事だよ。」

『ああ、それは運転手が余りにも悪びれた様子も無かった事にイラッとしてやっちゃった。』

「やっちゃったって。はあ。」

『どうしたの？あんまり溜め息をつくときれい逃げよ？』

「なあ、その喋り方は地なのか？」

『ううん。』

『キャラ付けだよ。』

『だってこの学園は変だからね。』

『これくらいしないと馴染めないでしょ？』

「その喋り方は余計と馴染めないような気がするけど。……」

・つて、今この学園が変だって言わなかったか？！

『言っただよ』

『だって、あんな大きな樹があるのに誰も変に思わないし、人は吹っ飛んでるし、さつき物凄く人間に似た人型ロボットも見だし、

さっきのだってそうでしょ？』

『あげれば限が無いよ？』

「そっだよな！変だよな！」

『何か溜め込んでそっだね？』

『僕に話してみれば？』

『聞く位ならするよ？』

「そっか？」

そう言っただけ千雨は今まで溜め込んでたモノを吐き出す様に話した。

『大変そうだね貴方も。』

「ああ、それと私の事は千雨で良いよ。」

『そう?じゃあ、僕はアス力で良いよ?』

「わかった、アス力。」

『そういえば。もしかして千雨ってネットアイドルのちう?』

「なっ!どうして?!」

千雨はビククリして言った。

『いや、何か見たことあるなっって考えたら浮かんで。』

『もしかしてあたり?』

「まじか。頼む!誰にも言わないでくれ!!」

『いいけど』

『その代り。今度コスプレとか見せて?それと地で話して?』

「わかった。だから誰にも言っなよ!」

『うん。』

そう返事をすると、千雨は思い出したかのように、

「そう言えば私の話を聞き終わった後、貴方もっていたよな如何  
いう意味だ?」

『それはですね。』

俺は魔法に関係する事を伏せ話した。

「マジか?!」

『マジだよ。』

『多分、千雨のクラスだよ。』  
「何で分かるんだ？」

そう千雨が訊くので俺は原作を知っているからとは言えず、魔法関係抜きで魔法関係の事をおわす様に憶測を話した。

「お前、異常側の人間かよ。」  
『うん』

『だから、何故千雨を抜いたこの麻帆良の人達が“異常”を“異常”と認識しないのかも知ってるよ。』

「なっ！ そうなのか？ だったら・・・」  
『考えもせず迂闊に訊くのは辞めといた方が良いでしょう。』  
「何でだ？」

『訊いてしまったら戻れないから。』

そう俺が言っていると千雨は少し考えて言った。

「そうだな。ありがとうアスカ。」  
『お礼は良いよ。』  
『でも、巻き込まれる可能性があるからこれあげるよ。』

そう言っただけ俺は障壁と結界、それに送信の術式が入った指輪の入ったお守り袋を渡した。

「これは？」  
『それは守りだよ。』  
『何かあれば僕が分かるようになってるから。』  
『出来るだけ肌身放さず持っていて？』  
「わかった。ありがとう。」  
『うん』

『じゃ、僕は行くけどこれ僕の携帯番号とメアド、何かあったり愚痴りたいとき何時でも掛けてね。』

「わかった。これは、私の番号だ私も愚痴とかなら聞くよ。」

『ありがとう』

『んじゃ』

『また今度とか!』

そう言っつて俺は家に帰った。

＼アスカ side end＼

＼千雨 side＼

アスカが行った後、私も寮に帰ってベットに飛び込み寝転んだ。

「は〜あ。今日は色々あったな。」

そう言っつて私はアスカに貰ったお守りを見ながらアスカの事を考えていた。

その後ブログを更新して、ブログの更新をした後、考える事はアスカの事ばかりだった。

＼千雨 side end＼

## 第7話（後書き）

なんかアスカに対する千雨の態度がご都合主義みたいな感じになってしまった。まっいいか。良いのか？ 作者はリア充で無いので恋愛とか分かりません（笑）。

## 第8話

（第三者 side）

朝早く麻帆良女子中等部学級主任の新田が学園長室に説明を求めに入って行った。

「どういう事ですか学園長！」

「フオ！一体如何したんじゃね新田先生？」

「如何したもこうしたもありません！これは何ですか？！」

そう言つて新田は女子中等部の職員に配られたプリントを近右衛門の眼前に出し見せた。

「ふむ。これはこの前配布したプリントじゃな。おかしい所でもあるのかの？」

「おかしいも何も、おかしいことしか書いてないじゃないですか！？」

新田の持ってきたプリントには、アスカのプロフィール、アスカが2-Aに編入する事とその後教師をする事が書かれていた。

「このプリントに書かれている少年はまだ数えで10歳じゃないそうですか？！そんな子がどうして中等部、それも女子中等部に編入なんですか？！それにその後教師になるとはどういうつもりですか？！」

「い、いやのお。新田君。その子は大学を飛び級で出ておつての？」

「だとしても女子中等部に入れることはないではないですか！」

「じゃ、じゃがの新田君。」

「じゃがではありません！彼はまだ大人から色々な事を教わる立場にある年齢の子供です！その子供が同じ子供、いえ自分より年上の子供たちに教師として指導する事が、少なくとも教える側の彼にも教えられる側の彼女たちにも良い影響があるとは思いません！考え直してください学園長！」

「新田君。君が心配するのは分かる。」

「なら学園長。」

「じゃが、これは決まった事じゃ。変えることは出来んのじゃ。」

「なっ！学園長！」

新田が近右衛門に問いただそうとした時、

コンコン

『学園長。アスカ・スプリングフィールドです。』

とアスカがやってきた。

「アスカ君かはいりたまえ。」

「学園長！まだ話は終わってません！！」

『失礼します。』

そう言ってアスカが入ってきた。

『もしかしてお邪魔でしたか？』

～第三者 side end～

～アスカ side～

今日から麻帆良女子中等部2・Aに編入することになった。制服はこの前男子中等部の制服のサイズが無いからと女子の制服が送られて来たから、すぐさま学園長室に殴り込みに行っちゃんと作って貰った。

そんな感じで俺は制服に着替えるなどの身支度を済まし、シャマルが作った朝食を皆で食べ、その後少し早めに家を出た。

『良い天気だな。』

と音楽を聴きながら学園長室に向かった。

学園長室の前に着くと中から話声が聞こえたがそれを無視して

コンコン

『学園長。アスカ・スプリングフィールドです。』

「アスカ君かはいりたまえ。」

『失礼します。』

そう言っただけ俺は中に入っていた。

中に入ると学園長の他に新田先生と思われる人が1人いた。

『もしかしてお邪魔でしたか?』

「いや、大丈夫じゃアスカ君。」

『そうですか。それで、そちらの方は?』

そう言っただけ俺は新田(仮)先生を指して言った。

「彼は新田先生じゃ。麻帆良女子中等部学級主任をされておる。それと新田先生。彼がアスカ・スプリングフィールド君じゃ。」

「よろしくスプリングフィールド君。私は新田和彦だ。」

『よろしく願います、新田先生。知ってるかも知れませんが僕はアスカ・スプリングフィールドと言います。アスカと呼んでください。』

「わかった。アスカ君と呼ぼう。」

「自己紹介はおわったかの？それでじゃ、アスカ君。」

「少し待って下さい、学園長。」

学園長が何か言おうとするのを新田先生が遮った。

「ふお？如何したのじゃ新田先生？」

「アスカ君に少し話があるのですが。」

「話かの？」

「はい。話と云うか質問に近いものですが。アスカ君良いかね？」

『構いませんよ。どんどん訊いて下さい。』

そう言い俺は新田先生と話をした。話していて新田先生がどれ程生徒を大切に思っているのかが分り最後の方は括弧が取れた話し方になった。

「新田先生。僕は貴方みたいな先生に色々教わりたかったです。」

「如何いうことかね？」

「僕は卒業した学校でイジメられていたんです。それを教師は知っていました。彼等のやった事は、僕の兄弟や親代わりの保護者の人に僕がイジメを受けている事を知られない様に隠蔽することでした。だから新田先生のような生徒をちゃんと思いやれる先生が居る学校に通いたかったなと思って。今更ですけどね。」

おれがそう言つと新田先生は、励ましの言葉を呉れた。

その後は新田先生が俺の教師としての先生をすると名乗り出て俺は二つ返事でOKした。

「フオフオフオ。どうやら話は終わった様じゃな。」

『学園長居たんですか?』

「ふお!それは酷くないかの?」

『冗談ですよ。』

「そういう事にしとくかの。新田先生、あとはしずな先生に頼むから下がってくれて構わんど。」

「そうですね、わかりました。それじゃあアスカ君私は失礼するよ。」

『はい。新田先生これからご指導の程よろしくお願いします。』

そうして新田先生は出て行った。

「それでは、しずな先生が来るまで少し待ってくれんかの?」

『分かりました。』

それから暫らくしてしずな先生が来て俺は彼女について行って2

- Aの前にやってきた。

『でも大丈夫なんですか?いきなり転校生が来たら授業が潰れちゃうかも知れませんか?』

「この時間の授業はHRで高畑先生が出張で居ないから特にする事も無いの、だから大丈夫よ。じゃあ、私が呼んだら入ってきてね。」

そう言ってしずな先生は教室に入っていた。

『さて、どんな言葉を言おうかな?』

「アスカ君入ってきて。」  
『はい。』

～アスカ side end～

～第三者 side～

今日も2 - Aは元気だった。

「な～アスナ。しずな先生おそない？」

「そうね～。こんなに遅いと自習になるんじゃない？」

「そうやね～。」

ガラガラガラ

「はい。皆さん席についてください。今日は転校生を紹介しま  
す。」

「うそっ！私の情報網に入っていない！！」

「先生！どんな子ですか？」

「それはわお楽しみにね？それじゃあ、アスカ君入ってきて。」

『はい。』

しずな先生がアスカを呼んで、アスカはそれに返事をしながら入  
ってきた。

「さ、アスカ君自己紹介を。」

『世界は平凡か？未来は退屈か？現実 is 適当か？安心しろ、それ  
でも生きることは劇的だ！』

そんな訳で、今日から皆さんと同じ教室で勉強させていただく、  
アスカ・スプリングフィールド！10歳ですつ。皆さん友達になっ



台所によくいる黒い奴です。』

「お兄さんと仲悪いの？」

『ええ。仲が悪いと言うから歳までは必要最低限な事だけ喋って、それからは一度話したきりですかね。』

「そうなんだ。じゃあ最後にこのクラスで気になる子は？」

『貴女です！』

「えっ！」

朝倉は速攻で返され尚且つ自分だと言われて面食らった。

『嘘ですよ。』

「えっ！嘘？」

『ええ、嘘です。まだこのクラスの人達の名前が分からないので？すいません、しずな先生出席簿見せてもらえませんか？』

「はい。どうぞ。」

そう言っしずなはアスカに出席簿を渡した。

アスカはそれを受け取り、名前と顔を覚えながら少し考え答えた。

『そうですね。15番桜咲刹那さん、18番龍宮真名さん、20

番長瀬楓さん、21番那波千鶴さん、25番長谷川千雨、それに26番エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんですかね。』

「ほ。お。その理由は？」

『禁則事項です?!』

「え。教えてくれないのぉ？」

『教えて僕の好みとか知られたくないですからね。』

「好みって事はそういう対象として選んだって事だよな？」

『ご想像にお任せします。』

「ふふふ。じゃあ、最後にその喋り方は？」

『これはキャラ付けです。』

「言っちゃって良いの？」

『別に気にしません。それで、質問は終わりですか？』

「うん。ありがとね。」

「終わった様ね。アスカ君はマクダウエルさんの隣ね。」

『分かりました。』

そう言ってアスカはエヴァンジェリンの隣の席に移動した。

『よろしくお願いします。マクダウエルさん。』

「よろしく、アスカ・スプリングフィールド（後で屋上に来い）。

『分からない所とか教えてくださいね？（わかりました）』

こうしてアスカの顔見せは終わった。

〈第三者 side end〉

## 第8話（後書き）

エヴァンジェリン以外の名前を上げた人がヒロイン候補です。それと+木乃香とさよみたいな感じですかね。さよは如何するか決めかねていますが・・・

少しネタばれで、エヴァンジェリンは良き師であり友であるという設定にしていこうかなと考えています。

第9話（前書き）

今回は短め。

## 第9話

（エヴァ side）

今日は珍しくサボらずに教室に居た。いつもならあの男にかけられた忌々しい呪いによって無理やり登校し、屋上や部活時間まで人の来ない茶道室、はたまた直ぐ帰ると言うのがいつものパターンだったが、今日はあの男の2人居る息子の内、無能と言われている子供が来ると聞いて何と無くあの男の息子を見ようと思いい教室に居た。

「茶々丸。本当に奴の息子は今日来るのか？」

「はい、マスター。教職員配布されたプリントにはそう書いてありました。」

「そうか。」

そんな会話をしているとしずなが来て奴の息子呼んだ。

奴の息子の第一印象は歪んでいて独特の口調をした美少年と言う感じだった。歪んでいると言っても、私みたいに長い歳月を過ごした者が、人の心に敏感なもの位いしかわから無いそんな歪みだが。そんなことを考えていると朝倉が奴の息子のアスカに色々質問していた。その質問の中で引つ掛つたのは家族構成で、両親共に育児放棄と言うところが引つ掛つた。奴はもう10年前に死んだ筈なのにアスカの言い方はまるで奴が生きている事を前提に言っていた。そんな疑問を感じ考えられているとアスカは此方に来ようとしていた。その時アスカは一瞬、武術の歩行（あれは多分剣術だろう）をしこちらに来た。あの歩き方からあいつは力を隠しているのに私は気付きアスカに興味を覚え挨拶してきた時に思念で屋上に呼びつけた。

HRが終わると私は茶々丸を伴い屋上にいった。少ししてからアスカは来た。

「ふつ。来たか。」

『遅くなつてごめーん。』

その独特の喋りと余りにも感情の籠つてない謝罪をしながら。

＼エヴァ side end＼

＼第三者 side＼

アスカはエヴァが教室から出た後少しして知られざる英雄を使い  
2-Aの生徒に一切認識されずに教室から抜け出し、鼻歌（秋色の  
アリア）を歌いながら屋上に向かった。

『遅くなつてごめーん。』

アスカはただ遅れたからそう言っただけという風な感じで全く悪  
かったとも思つていなかった。

「ふん。言葉だけの感情の無い謝罪など意味は無い。」

『そうだねえ。それで用事は何？<sup>ターク・エヴァンジェル</sup>闇の福音。貴女の様なヒトに呼  
び出されるいわれは無いんだけど？』

「ほお。良く分かったな私が闇の福音だと。」

『まあね。初めはビックリしたよ？闇の福音が幼女でしかも東国  
の島国に封印されてるなんてさ。』

「幼女だと？！貴様あ、私に喧嘩を売っているのか？！！（怒）」

『喧嘩なんてとんでもない！貴女のような魔法使いからすれば僕  
なんてそこいらの塵以下の強さしかない取るに足らない存在です  
から。』

そうアスカは言った。

「塵以下の強さねえ。お前力を隠してるだろ？」

「何の事かなあ？僕は魔法学校でも落ち零れの存在ですよ？」

「嘘をつくな。さっきの挨拶の後、貴様ワザとに武術の歩行をしただろ？」

「あは？やつぱり分かりました？あれに気付いたなんてやつぱり凄いですねえ。」

「フン。私を甘く見るな。それにクラスでも何人が気付いてたぞ？」

「そうですね。古菲さん、桜咲刹那さん、龍宮真名さん、超鈴音さん、長瀬楓さんも気付いてましたねえ。それで力を隠していたから何なんですか？」

「お前の実力に興味が湧いた。だからそれを知るために私の家に来い。」

「えっ！？嫌です！！！」

アスカはエヴァの提案を脊髄反射とでも言うべき速度で返した。

「即答か！？」

「即答ですね。」

「何故嫌なんだ！？」

「だって、メンドクサイじゃないですか。」

「そんな理由でか！？」

「十分じゃないですかあ？それで納得できないならしょうがないですね……」

そう言ってアスカはアリバイブロック腑罪証明を使い茶々丸に肩にちょうど肩車をされる格好で移動していた。

『これでどうですか？』

「なっ！どうやって移動した！！？」

「マスター。魔力、気、共に感知されず。カメラにも移動した瞬間は移っていません。」

茶々丸の言葉にエヴァはますます驚愕し、恐怖した。なぜなら魔法も気も使わない自分の知らない移動法で移動したからだ。確かにエヴァは不老不死だが攻撃を受ければ痛みを感じるし、不死殺しの武器を使えば死んでしまう可能性もある。アスカは誰にも気付かれずそれができるからだ。はつきり言っただけ防ぎようが無い。

『これで納得して貰えました？まあ、して貰えなくても関係ないですが。』

そう言っただけアスカは腑罪証明アリバイブロックを使い入り口まで移動し扉を開け言った。

『んじゃ。また後でとか！』

そう言っただけアスカは出て行き知られざる英雄ミスターアンノウンを使いコツソリ教室ミスターアンノウンに戻り、知られざる英雄をきつて、創造幻想で創った存続認識スキルメーカーを使いサボった間も居たという風に周りに認識させ何事も無かった様に授業を受けた。

〈 第三者 side end 〉

## 第9話（後書き）

オリジナルの異常

・ 存続認識・・・その場に途中から来てもこれを使うと周りは初めからそこに自分は居たと誤認識させることが出来る。分かりやすく言つと、ミスターアンノウン知られざる英雄の効果の逆バージョン。

設定に書いてないめだかボックスに出てきた異常や過負荷や私が考えたオリジナルの異常や過負荷の説明はこうして後書きに書いていきます。もしかしたら設定として纏める事もあるかも知れませんが、

では、また次回。

## 第10話(前書き)

アスカや2-Aの生徒の口調が所々可笑しい所や誰が話している  
か分らない所がありますがネギま<sup>ノットイコール</sup>悪平等を名乗りし夜天の王<sup>ノットイコール</sup>第  
10話どうぞぞ!

## 第10話

「アスカside」

エヴァンジェリン達の所から教室に帰り真面目に授業を受け放課後になった。

「ねえねえ、アスカ君。この後学校を案内して上げようか？」

「あ！抜け駆けなんて桜子ずる〜い！！」

「そうですね桜子さん！ここは学級委員長のこの私が！」

「ははは！でた委員長のシヨタ趣味。」

そうして、クラス全体が騒がしくなった。そんな中

「それで如何するのアスカ君？」

今日は帰ったらシャルマル達が店をするのでその準備の手伝いをするので

『すいませんが今日は用事があるからまた今度こっちから誘わせて貰いよ。』

俺はそう言った。

「そうですね。それじゃ仕方ありませんわ。」

「ねえねえ、用事って何〜？」

『それはですね。知り合いが店をするのでその準備の手伝いをするんですよ。』

「なんのお店をするの〜？」

『チヨツとした香水とか、アロマとかの販売もしている喫茶店だよ。』

「へへえ。オープンしたら行って見ても良い？」

「あ！あたしも！！」

「へっ！じゃあ私も！！」

そう言っつてクラスの殆どがそう言った。

『構いませんよ。というか聞かなくても来てくれれば良いですよ。オープンしたら皆さんに知らせますね。』

「うん！よろしくね〜！！」

『それでは僕はこの辺で帰りますよ。』

「「「「「「ばいばい、アスカ君！！」「」「」「」

そう言っつて俺は2・Aを出て帰宅した。

俺は帰る途中、後ろを着いて来る気配を感じて人気の無いところに移動しいった。

『さつきからついて来ている人、出てこい。さもなければ警察に通報するぞ？』

俺がそう言っつと俺を付回していた奴等が出てきた。

「それは止めてくれないかなアスカ君？」

『あなた達は、確か桜咲刹那さんに龍宮真名さん何かようですか？』

俺がそう訊くと桜咲刹那は俺を睨み続けたまま言った。

「貴様何の目的で此処に来た!!」

『何の目的ですか？卒業課題をクリアしに来たんですよ。』

「卒業課題？」

『ええ、魔法学校の卒業課題で日本で教師をする事になったから、その前準備で生徒として授業の進め方を体感する為に此処に来たんですよ。』

「嘘をつくな！貴様はお嬢様を狙ってきたのだろ!!」

『龍宮さん。桜咲さんは何を言っているんだ？』

「ああ、刹那は君が私達と同じクラスの近衛を狙ってきた刺客だろうと疑っているんだ。」

『なるほど。それなら学園長にでも聞きなよ。でももしかしたら僕の事を敵だと言うかもしれないけどね。』

俺は学園長達に宣戦布告したことを思い出しそう付け加え言った。

「それは如何いうことだ？」

『学園長には宣戦布告したからね。』

「宣戦布告。」

『そつ。だから敵なのかそうじゃないのかはつきりしないと思うよ。』

「なら貴様を斬る!!」

そう言って辻斬りの如く刀を抜く前にアリバイブロック腑罪証明で刹那の背後に回り耳元で言った。

『そう焦るなよ。』

「ひゃん!!いつ、いつのまに!？」

刹那は可愛らしい悲鳴を上げ言った。

『可愛らしい声だな。1つだけ良いことを教えてやる。』

「良いこと？」

「それはなんだい？」

『あのクラス・・・2-Aのクラス構成を調べてみるよ面白い事が分かるよ？』

「調べるとは如何いうことだ？」

『そうだな。クラス全員が仮契約した時に出ると思われるアーティファクトや、クラス全員の魔法に関するポテンシャルを調べてみる。』

「そうすれば分かるのか？」

『ああ、それに英雄の息子と言うモノを加えれば学園長が何を考えてあのクラスにしたのか分かるぞ。んじゃ、僕は帰るよ。また明日。』

そう言っアリバイブロッケて腑罪証明で家に帰った。

～アスカ side end～

～第三者 side～

アスカが去った後。

「龍宮。どうやって移動したか分かったか？」

「すまない刹那。分からなかったよ。あれは相当の実力者だな。」

「ああ、そうだな。龍宮、アスカさんが言った事調べてみてくれないか？」

「わかった。料金は私も知りたいからね餡蜜1回奢りで良いよ。」

「わかった。近い内に奢る。」

「交渉成立だね。」

そう言って刹那たちは寮の自分達の部屋に戻った。

〜第三者 side end〜

## 第10話（後書き）

2 - Aとの会話で誰と話しているか分らないと思います。がそこは皆様の判断にお任せします。

## 第11話

〔第三者 side〕

色々あった登校初日を終えた次の日の朝。アスカは守護騎士達とシャマルとアインの作った朝食をのんびりと食べていた。

「シャマル。味噌汁御代わり。」

「わかったわアスカ君。」

「主アスカ。ご飯の御代わりは如何ですか？」

「じゃあ、貰おうかな？」

「お入れします。」

「はい。アスカ君味噌汁の御代わり。」

「ご飯の御代わりです。主アスカ。」

「ありがとう。二人とも。（ニコッ）」

「ハウツノノノ。」

アスカ絶対至上主義のシグナムとシャマルはアスカに微笑みを向けられ顔を赤くした。

「どうかした二人とも？」

「何でもありません（何でもないわ）！！」

「そうか。」

アスカはシグナムとシャマルの様子が可笑しい事に疑問を感じたがいつもの事なので気にせず味噌汁を啜った。

「それにしても和食美味しいなあ。今日の味噌汁はアインか。」

「そうです主。美味しくなかつたでしょうか？」

「そんな事無いよ。ただ、また腕を上げたなあと思っただけだよ。」

「ありがとうございます主。」

アスカが味噌汁を飲みながらほっこりしていた時ザフィーラが言った。

「主。御時間は大丈夫ですか？」

「えっ？……うわ~~~~~っ、遅刻する~~~~~っ」

「!!!」

アスカはそう叫びながら急いで残りの朝食を食べ学校に向かった。

「今日は学校とか案内して貰うから少し遅くなる。それじゃあ、行つて来ますっ!!!」

「~~~~~行つてらっしゃい主（アスカ）主アスカ（アスカ君）

!~~~~~」

そう言つてアスカは守護騎士達に送り出された。

アスカは人類最終の身体能力をフルに使い猛ダツシュをし遅刻せず済んだが、下駄箱で中履きの靴に変えている時に光化静翔TEAMソングや腑罪証明ハイブロックを使えば良かった事に気が付いてorzと落ち込んだ。そんなアスカを普通に登校してきた千雨が変なものを見るような目で見て、これ以上ここにアスカが居るのは邪魔になると思い、ちよつと登校して来た千鶴に手伝つて貰い教室に運んだ。

「……はっ！あれ？如何して俺は、『ゴホン。僕は教室に居るんだろっ?』」

気が付いたアスカは少しキャラが崩れていたがそれに気付きキャラを被り直した。

「ああ、下駄箱で何か落ち込んでたから那波に手伝って貰って教室に運んだんだ。後で那波にもお礼を言っとけよ？それとアスカ、お前キャラが崩れてるぞ。」

『そうなんだ。手間をかけさせてごめんなさい。ありがとう千雨。』

アスカはキャラが崩れていると言う所は無視して、千雨にお礼を言った。その後千鶴の下に行きお礼を言い、その時千鶴に千鶴で良いと言われた。

キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン

「はい。皆おはよう！」

「「「「「「「「高畑先生おはようございま〜〜す！」「」「」「」

高畑が珍しく来てSHRで必要事項を言い、その後普通に授業が始まった。

6限目が終わり皆が帰宅の準備や部活の準備をしているときアスカは千雨に話しかけた。

『ねえ〜、千雨。学校を案内してくれないかな？』

「ん？私がか？」

『そう。お願いできないかなあ〜？』

「良いよ。」

『わあ〜。ありがとうっ。』

こうしてアスカは千雨に学校を案内して貰い、ついでに学校の周りのお勧めの店や、千雨の行って見たかった店に行った。その間、千雨は学校で見せない肩の力が抜けた穏やかな顔をしていたので、はたから見れば学校案内というよりデートに近いものに見えた。

千雨はアスカと別れた後、自分がアスカの前では終始肩の力が抜けた事に気付きアスカへの好感度を上昇させ、何気にアスカはフラグを建てていた。

〈第三者 side end〉

## 第11話（後書き）

てなわけです。第11話でした。今週は大学のレポートやテストなどでなかなか時間が取れませんが今週中に2話書ける様頑張ります。

第12話(前書き)

第12話。短いですがどうぞ!!

## 第12話

＼アスカside＼

なんやかんやあつて1ヶ月半近くがたった。えっ、何があつたか  
つて？色々あつたんだよ！それはもう色々だね。

例えば、エヴァに興味を持たれて付き纏われたり、茶々丸に付き  
合つて猫のエサやりと一緒にやつたり、茶々丸に攫われてエヴァの  
下に連れて行かれ別荘でエヴァやチャチャゼロと1対1や1対2の  
力試し殺し合いをやらされた。その他にも、千雨のコスプレ見たりさせたり、  
千雨のサイトに千雨と一緒にコスプレしてその写真を載せたり、千  
雨とはなんか只ならぬ関係だと噂が流れたり、お詫びに千雨のサイ  
トにちよくちよくコスプレした写真をのせたり、刹那と真名と仲良  
くなつて俺の持つ別荘で一緒に守護騎士達と訓練したり、刹那が別  
荘にいる間の刹那の護衛ストーカーを手伝つたり、歓迎会のパーティーとかそ  
んな感じで1か月半近くだった。

結果として、エヴァとは友情みたいな関係を築けたし、千雨や刹  
那と真名と甘味屋に行つたりする友人関係になつた。今考えると俺  
つて良くある転生者と同じこととしてんじゃねえ？それに結構リア充  
だし。

ああっ！ちなみにエヴァ達との力試し殺し合いはどんな感じだったかと言  
うと・・・。

＼回想開始＼

「ふふふ。来たか、アスカスプリングフィールドっ！！」

エヴァが格好良く俺にそんなセリフを吐いた。

『何がよく来たなっ！だ。来たと言うより連れて来させたんだろ  
うが。それで何の用なんですか？ようが無いら帰りますよ。』

「用ならあるさ。お前の力を試してやる。何処からでもかかって  
来いっ！！」

『えーっ。嫌ですよ。何でそんな事しなきゃいけないんですか、  
めんどくさい。てなわけで帰らせて貰いますよ。』

「させるかっ！！【魔法の射手・氷の4矢！！】」

『うわっ！何をするんですか？！』

帰ろうとした俺にエヴァが魔法の射手を背後から撃つて来たのを  
反射神経で普通に避けエヴァの方を向いて言った。

「ほお。今を避けるのか。ならこれはどうだ。【リク・ラク・

ラ・ラック・ライラック、闇の吹雪！！】」

『うおっ！！』

俺は腑罪証明や反射神経で避け、その後エヴァをおちよくりなが  
ら避け続けた。

「ちゃんとしろおー！！【魔法の射手・氷の141矢！！】

『はあ。めんどくさいっなっ。』

俺はそう言っアリバイブロックて腑罪証明でエヴァの背後に立ち、魔力で強化した  
手刀をエヴァの首筋につきたてた。

『これで良いか？』

「！！ふっ。やればできるじゃないか。だが油断はいかな。」

『なにおっと。危なっ！』

「ケケケ。オマエナカナカヤルナ。」

俺は反射神経オートパイロットで避けいった。

『それは何ですか？』

「ああ、こいつは私の初めの従者、チャチャゼロだ。」

『よろしく。』

「ケケケ、ヨロシクナ。ソンジヤサツサトコロシアオウゼ。」

そうして俺は2対1で戦ってエヴァ達にかつた。

〈回想終了〉

とまあ、こんな感じで殺しあつた。あとでエヴァにバクキャラ認定されました。

〈アスカ side end〉

## 第12話（後書き）

後1 3話書いたら原作時間に入ると思います。

### 第13話(前書き)

デバイスの音声は で表記します。それとデバイスの音声は私  
が英語が全くと言っていいほどできませんので基本は日本語になり  
ます。

それでは、ネギま<sup>ノットイコール</sup>悪平等を名乗りし夜天の王<sup>ノットイコール</sup>第13話どうぞ  
！！

## 第13話

く千雨sideく

今日は買い物に行っていて帰るのが遅くなってしまった。

「あああ。こんなに遅くなるならアスカにも付き合っただけで済めば良かったなあ。」

私は暗い帰り道を歩きながらぼやいた。

「あつ。でもアスカは子供だしな。暗くなるまで付き合わせるのもダメか。というかさつきから私アスカのことしか考えてないんじゃないか？」

そうやって私はアスカが私たちにしか見せない自然な笑顔や、何かを考えている時の10歳の子供がしないカツコイイ表情や括弧無しの話し方などを思い出していた。

「こうして考えると私、アスカが好きなのかも知れない。やべえ。私、委員長見たくシヨタになってんじゃん。」

私は自分がシヨタかもしれない事実にはショックをうけた。

ドン！カキン！バン！ドン！バン！ドン！ドン！バン！バン！バン！

「なんだこの音？」

そうやって、普段なら近づかないはずなのに今日の私はどうかし

ていて音のする方に行ってしまった。

行った先には変な格好した教師や変な格好した人間が化け物と戦っている所だった。

「ヒツ。なんだよあれは。」

そう言っただけに逃げようとしたが石に躓いて転んで荷物をぶちまけて、化け物とかにばれてしまった。

「なつ！君は！どうしてこんな所に！」

「早く逃げなさい！」

そう言っていた変な格好の奴らは化け物にやられて動けない状況だった。

「残念だったな小娘。ここで死ねっ！！」

化け物はそう言ってデカイ棍棒みたいなのを振り下ろした。私はとっさにアスカの名前を心で叫びながらアスカに貰ったお守りを握りしめていた。

カキン！

「えっ！！」

「なんだとっ！！」

化け物の攻撃は私を包むバリアみたいなものによって阻まれた。

「なつ！結界だとっ！小娘貴様っ、術者かつ！ならこの結界が壊れるまで攻撃すれば良いだけだっ！！」

そう言っただけ物は他の化け物と一緒に私の周りに張られた結果に攻撃し始めた。

「助けて、助けてアスカっ!!」

【刃<sup>も</sup>以て、血に染めよ。穿<sup>うが</sup>て、ブラッディダガー!!】

その声と共に赤色の何かが化け物達に殺到して行った。

『あはっ!大丈夫?』

「主。もう少し緊張感を持ってください。」

そう言っただ、私の前にアスカとアインさんがいた。

く千雨side endく

く第三者sideく

千雨が戦闘に巻き込まれ、アスカのお守りが発動する前、アスカは守護騎士たちとくつろいでいた。

「はあ。なんか面白い事無いかなあ。」

「ならゲームしようぜアスカ!」

「良いよ。何する?」

「ガンダム無双しよう!」

「わかった。っと、ああ、ごめんヴィータ用事ができた。」

アスカがそう言っただアインが聞き返してきた。

「何かあったんですか?主。」

「ああ、千雨にあげたお守りに掛けていた結界が発動した。ちよ  
つと行ってくるわ。」

「それならお供します。主アスカ。」

「あつ！なら私も行く！」

「いや。俺一人で大丈夫だから一人で行ってくるわ。」

「主。せめて1人は連れて行ってくださいっ！」

「心配性だなアイン。つと、わかったからそんな目で見ないでく  
れっ！！！」

アインはアスカに泣きそうな顔で言った。

「じゃあ、アイン付いて来い。」

「御意っ！」

「それじゃあ行くか。夜天の書、セットアップ！  
セットアップ

そう言つてアスカは夜天の書を起動させ、八神はやてのバリアジ  
ヤケットを男性用に仕立て上げたデザインのバリアジャケットを纏  
った。

「スレイプニール展開。」

S l e i p n i r

「行くぞ、アイン！」

「はい！」

そう言つてアスカ達は全速力で千雨のいる方向に向かった。

アスカが千雨のいる地点の近くに着くとそこからは千雨を守る結  
界に攻撃している鬼たちの姿だった。

「如何しますか、主？」

「どうするもこうするも、こうするんだ。【刃<sup>も</sup>以て、血に染めよ。穿<sup>うが</sup>て、ブラッディダガー!!!】」

そういつてアスカは鬼たちにブラッディ・ダガーを撃つて、千雨の下に行つた。

『あはっ！大丈夫？』

「主。もう少し緊張感を持ってください。」

「君たちは一体何者だ!？」

「アスカにアインさん!!!」

『千雨迎えに来たよ？』

「聞くなよ!!それにしてもよくわかつたな？」

『それのおかげさ。』

「このお守りの？」

『そつ。詳しいことは後でね。』

そういつてアスカは鬼たちの下に行つた。

「アスカ君何をするつもりだ！」

『決まつてるじゃないですか。あれを倒すんですよ。』

「魔法学校の落ちこぼれの君には無理だ!逃げなさい!!」

『うるさいなあ。黙ってくれませつんと。おいおい危ないなあ、いきなりなんて。』

「それはこちらのセリフじゃ坊主。おかげでわしを含めて10体以下になつてしまたわっ!!!」

『そうですか。喰らえ【ブリューナク!!!】』

「ぐおっ。」

アスカは鬼たちにブリューナクを撃つた。

「あの小僧から殺ってしまえ！」

リーダー格と思われる鬼の命令でアスカに鬼たちが攻撃を仕掛けた。

『喰らえ【デイベインバスター！！】』

そう言っただけで向かってくる鬼たちに砲撃し、機動力に優れたものは何とか避けたがそうでないものは還って行った。

「なんちゅう砲撃や。化け物か!?!」

『酷いなあ。でもこれで終わらせるよ。【全てのモノよ。闇に、染まれ。】』

「いけない!!」

そう言っただけで、アインは千雨と自分の周りをおおう結界を張った。その結界は近くに倒れていた魔法先生や生徒も包む大きさで張られた。

『じゃあ、さようなら。【デアボリック・エミッション!!】』

Diabolic Emission

アスカの放ったデアボリック・エミッションは鬼たちを中心に結構な範囲を消し飛ばした。

『さあて終了終了。』

「何が終了終了だ!アインさんが守ってくれなかったら今頃はお陀仏してたわ!!」

『大丈夫だよ。アインに守っただけで頼んだもん。それじゃあ、帰

ろっか？』

「待ちなさい君達！」

『なんですかあ？ガングロさん。何にもないなら、いやあっても俺たちは帰りますよ。じゃあ。さようなら。』

そう言っオルフィクションてアスカは大嘘なほ憑おきでデアボリック・エミッションで破壊された物を戻し、アインと千雨を連れて腑罪証明アリバイプロックでアスカの家に帰った。

～ 第三者 side end ～

## 第13話（後書き）

第13話でした。なんか最後のほうぐだぐだになった気がします  
が・・・。

それでは次回をお楽しみに！！

## 第14話（前書き）

なんかぐだぐだ感がありますが、ネギまノットイコール悪平等を名乗りし夜天の王王第14話どうぞ。

## 第14話

～第三者 side～

アスカはアインと千雨を連れて腑罪証明アリバイプロックを使い、家に戻ってきた。アスカは守護騎士達に席をはずしてもらった。

「それで、アスカあれは何なんだ？」

『あれね。そうだね、こうなってしまったんだから説明するよ。』

そう言っアスカは、魔法の存在、この学園のこと、その他にも色々な事を千雨に説明した。

「マジなのか？」

『自分で見たことが信じられない？』

「いや。すまないちよつと動揺してた。」

『そんで、千雨には二つの選択が出来ます。』

「二つの選択？というか、何だそのノリ、ちよつとウザイぞ。」

『そつ。二つの選択。一つはこのまま記憶を消して元の生活に戻る。二つ目は僕達が戦う術すべを教える。の二つだよ。』

「その二つしかないのか？」

『基本この二つしかないよ。ちなみに一つ目の記憶を消すの方は千雨の体質をついでに改善してあげるし、二つ目の方はちゃんと戦える様になるまで守るよ。』

「体質？」

『そつ、千雨は認識障害とかの魔法が効き難い体質なんだよ。だから記憶を消すだけではまた同じ事に巻き込まれる可能性があるんだよ。まあ、どちらにしる千雨は巻き込まれる運命なだけだね。』

（ボソッ）

アスカは最後の方を聴こえるか聴こえないかわからない程の小さな声で呟いた。

「おいっ！！最後のは如何いう意味だ？！」

『知りたい？』

「当たり前だろ！！！」

『じゃあ、教えてあげるよ。別に隠すほどのことでもないしね。』

そう言つてアスカは2・Aは自分たち、とりわけ自分の兄の従者候補の集まりである事を千雨に教えた。

「それは本当の事なのか？」

『確証は無いけど、本当のことだと思つよ。』

「それじゃあ、どちらにしろ選択は一つじゃないかよ！」

『そうだね。それでも聴くよ。長谷川千雨、君は如何したんだい？』

「そんなの決つてるだろ。二番目だ！だからちゃんと教えてくれよっ。」

『わかったよ。僕の扱きに耐えて魔法少女になってよ千雨。』

「わかったよ。これからよろしくたのむな、アスカ。」

『よろしく。それでだ早速だけど僕と仮契約しようか？』

「仮契約？」

『その説明はしてなかったね。』

そう言つてアスカは仮契約と本契約、その仕方とアーティファクトの説明をした。

『・・・てな感じなんだけど、生憎今出来る契約はキスの方の契約だよ。まあ血の契約も時間が掛かるけど出来るよ。どれにする？』

「キスの方でいいよ。」

『本当に良いのか？』

「良いって言うてるだろ！それにお前の事は好きだしな。（ボソッ）」

千雨が最後に呟いた言葉は幸か不幸かアスカには聴こえなかった。

『それじゃやるぞ。』

【パクティオーー！！】

チュッ

アスカと千雨が唇を合わせると、アスカ達は光に包まれ、2枚のカードが現れた。

『これが仮契約カードのコピーだよ。』

「おう。」

千雨の貰ったカードには、

名前：長谷川 千雨

契約主：アスカ・スプリングフィールド

称号：不屈の電腦姫

色調：黒

徳性：節制

方位：中央

星辰性：土星

アーティファクト：白い魔王の魔杖  
と書いてあった。

『白い魔王の魔杖ねえ。取りあえず来たれて言えば出てくるから。』

『  
アデアット  
来たれ!』

千雨がそう唱えるとカードが光り、1本の杖というかりりカルなのはの某管理局の白い魔王のデバイスが出てきた。

「これが白い魔王の魔杖。」

<そうです、マイマスター。>

「なっ!しゃべった?!」

<はじめましてマイマスター。私はレイジング・ハートと言います。よろしくお願いします。>

「よろしくレイジング・ハート。」

『凄いのが出たね千雨。』

「そうなのかアスカ?」

『うん。それはね。』

そう言っアスカはデバイスとレイジング・ハートの説明をした。そして説明をしていて遅くなったので千雨はそのままアスカの家に泊まることになった。

〜第三者 side end〜

## 第14話（後書き）

千雨のアーティファクトをレイ八さんにしました。他の候補としてはオリジナルのアーティファクト、チーム（仮）という、ネット関係のモノにしようかと思いましたが、考えていたこのアーティファクトの設定上千雨が魔法剣士タイプになってしまっているので魔法使いタイプになるレイ八さんにしました。ちなみにこのオリジナルアーティファクトはもう一つの方の作品でだそうと思います。もちろん千雨のアーティファクトとして。

## 第15話(前書き)

今回は結構短めです。

## 第15話

＼アスカside＼

千雨に魔法などを使った戦闘訓練をするようになった。

初めは筋肉痛を起こしていた千雨だが最近ではそんな事も無くなり、レイジング・ハートの魔導師ギブスのお陰で増えた魔力と、射撃を家に来ていた真名に習ったお陰で魔砲をばかすか撃つ様になり、乱射魔化してきてその内、第二の白い魔王化するのも時間の問題となってきた。ちなみに千雨は俺達との訓練とは別にレイジング・ハートの訓練プログラム（高町なのはのした）もしているのでその成長速度ははつきり言って高町なのはを上回っている。そして訓練のお陰で、体育と理数系の成績が上がった。

ああそれと、刹那に真名は千雨より若干少ないがそれでもよく家に来てご飯を食べたり、刹那はシグナムに剣と魔法を使った模擬戦や別荘の生物と戦ったり、真名はシャマルに銃の弾薬を作って貰って別荘の生物相手に戦闘をしたり、千雨の戦闘訓練と一緒に参加したり、家に泊まって行ったりして関係は良好だ。

ちなみに千雨達には別荘に入るときに老化を防止する魔法具を渡してある。

『という訳で今日の訓練を初めまーす。』

「如何言う訳だよっ！」

『ナイスツツコミ！（ゲッ）』

「それで今日は何をするんだ？」

『えっ。無視ですか？無視なんですか？』

「いいから先進めろよ。」

千雨は俺の言葉は無視して話を先に進める様促した。

『わかったよ。今日の訓練は別荘の生物などの捕獲で〜す!』

「何を捕まえてくれば良いんだ?」

『今日はデビル大蛇と、ブルーブラッドBBコーン、ガララワニ、サーロインキノコ、酒乱牛、醤油バツタの醤油を獲ってきて下さい。それと獲ってきたのは後で調理して食べさせて上げるからねえ。』

「本当か?!それなら今すぐ獲ってくるから!」

そう言っつて千雨は別荘に入っつていった。

〜アスカside end〜

〜第三者side〜

千雨は別荘の外の時間にして1時間で出てきた。

『早かつたね。』

「まあな。醤油バツタとBBブルーブラッドコーン、サーロインキノコ以外はデイベインバスターとかを非殺傷で喰らわしとけば案外簡単に済んだからな。それじゃあ、美味いもん頼むよアスカ。」

『任せといてよ。それじゃ作っつてくるね。シャマル、アイン手伝つて。』

「「わかつたわ(わかりました)。「」

そう言っつてアスカはシャマルとアインを連れて調理をしに行つた。そして出来た料理を皆で食べ、グルメ細胞を取り込んだアスカと、アスカに体を弄られてグルメ細胞を入れた千雨はグルメ細胞が少しだけ活性化し、また少し強くなつた。

〜第三者side end〜

## 第15話（後書き）

という訳でネギまノットイコル悪平等を名乗りし夜天の王ノットイコル第15話でした。

今回出したグルメ細胞は千雨の他にも刹那と真名もグルメ細胞をアスカによって移植されています。グルメ細胞のお陰で皆身体能力とかが成長しています。

## 閑話1（前書き）

アスカの話し方がぶれているような気がしますますが気にしないで下さい。では、ネギま<sup>ノブタイコ</sup>悪平等を名乗りし夜天の王<sup>ノブタイコ</sup>閑話1です。

## 閑話 1

↳ 第三者 side ↳

アスカが広域殲滅魔法で鬼達を消し去り、大嘘憑きで森<sup>オイルフィクション</sup>だけを直して去った後、その場に居たガンク口を含む数人の魔法先生と魔法生徒は魔法使いのかかり付けの病院にいき2、3日治療を受けた。その後ガンドルフィーニは学園長室に今回の事の報告とアスカの事を訊きに来ていた。

「・・・以上が今回の出来事です。」

「ふむ。アスカ君がお。」

「学園長。彼の力は一体何なのですか?! 聞いていた魔法学校では兄のネギ・スプリングフィールドや他の生徒より成績が良くなかったということでしたが、あれは一般のましてや落ち零れの魔法使いが普通に出来る事ではありません!!」

「ふむ。その事はいえないから諦めてくれんかのお。」

近右衛門はアスカに敵対宣言されている事言っではいけないと思  
いそう言った。

「言えないとは如何言う事ですか?!」

「言えんものは言えんのじゃ。」

「如何してですか?! 私達も関係者の筈です! 教えてください!  
!」

近右衛門はガンク口の気迫みたいなものにおされてしまった。

「わかった。今夜皆を集めて話そう。」

「わかりました。私の方から皆に伝えておきます。では失礼します。」

そう言っただけでガンダは学園長室から出て行った。

「はあ。ホンと如何しよう。」

そう言っただけで学園長は胃薬を出して飲んだ。

世界樹のある場所に麻帆良の魔法先生と生徒達が集っていた。

「真名。今日の召集の目的は何だと思う？」

「さあ。私としては早く帰りたいね。」

「そうだな。」

そんな感じでアスカの所から帰る途中によった刹那と真名は話していた。

「ふおふおふお。皆、集っているようじゃのお。それでじゃ、今日皆に集って貰ったのはアスカ・スプリングフィールド君の事じゃ。」

「学園長。彼が如何したのですか？」

「ふむ。それを今話すのじゃ。」

落ち零れであるアスカ・スプリングフィールドの事で集って貰ったと言う近右衛門の言葉に疑問を感じた魔法先生が質問した。その質問に答えようとした近右衛門の言葉にかぶせるように人が来た。その遅れて来た人物を見て集った人間は驚いた。

「ふおふおふお。皆のもの遅れて済まなかつたのお。」



『そんなに言いにくいのなら僕が変わりに話してあげましょうかあ？』

そう言ってアスカは讀心術を使い近右衛門がこの場で言おうとしていた事を代わりに言った。

「アスカ君！正義の魔法使いを敵に回すとは、君は何を言っているのか分っているのか？！君はあのサウザンドマスターの息子だろ！それにそれは悪の成り下がるという事だぞ！！」

ガングロはアスカが正義の魔法使いにならないと言ったところに噛み付いた。

『正義の魔法使いね。』

「如何したんだいアスカ君？」

高畑はアスカの何かを考えるかのように、思うところがある様に呟かれた言葉に反応した。

『それじゃあ、訊きますが“正義”とは何ですか？』

「決っています！悪魔や妖怪、悪い魔法使いなどと戦う私達のような人達の事です！！」

アスカの質問に麻帆良の脱げ女の異名を持つ事になる高音が答え、大半の者がそれを肯定した。

『なるほど。では、“悪”とは何ですか？』

「そんなの決っている！悪は悪だ！！エヴァンジェリン・・・闇の福音の様に人を殺している奴やこの麻帆良に来る妖怪達の事を言うんだ！！」

アスカの質問に今度はガングロが答えた。

「ふうん。エヴァンジェリンが“悪”・・・か。なら見方を変えてみたら如何だろうか。エヴァンジェリンが人を殺したのは相手が彼女を殺そうと襲って来たからだ。襲って来なければ死ななかつたんじゃないのかな？そもそも君達が知っているかは知らないが彼女は望んで吸血鬼になったわけじゃない、彼女を吸血鬼にしたのは魔法使いだ。つまり、魔法使いを“悪”とする見方もある。そもそもだ、英雄と言われている紅き翼にしたって、君たちの嫌いな人殺しの集団だ。」

「なっ！君はっ！！」

ガングロがアスカに何か言おうとしたがそれをエヴァが横から割って入った。

「アスカ。貴様、人のことをペラペラと。」

「来てたのかエヴァ。」

「爺に呼ばれたからな。それと私は自分の事を悪の魔法使いと思っっているぞ。人を殺した理由が自己防衛のためだとしても、人を殺したことには変わりないからな。」

「まあ、たしかにそういう見方もある。というか大半はそういう見方だ。“正義”とは主観的モノであると僕は考える。相手を“悪”と決め込んだ上で、自分の道理で相手を押しくるめる事を“正義”とする。そこにおいて相手の言い分には耳を貸さない。そこを曲げてはいけないと思う。“正義”とは立場を表す言葉ではない。“正義”とは、貫くものだ。」

「ははははははは！面白い、面白いぞアスカっ！！。そのMMの元老院の掲げる正義に真っ向から喧嘩を売る意見。面白いぞっ！！」  
「お気に召して貰って何よりだよエヴァ。まあ、僕が何を言いた

いかと言うと、“すべての正義は同時に悪である”という事さ。見方を変えるだけでこの世界は“悪”に満ちている……そう考えると、世の中は、また、違って見えてくるものだ。例えばMMの元老院の掲げる正義に則って自分たちの事を正義の魔法使いと言っている奴等も“悪”であるという風にね。』

アスカの言葉を聞いてMMの掲げる“正義”を盲信している者はアスカに反感を、“正義”の魔法使いと言うことに其処まで興味の無いものはアスカの考え方に各々色々感じる事があった。

『……まあ、僕の考えにあなた達が如何思おうと僕は自称正義元老の魔法使いを螺子伏せるだけだね。』

そう言つてアスカは腑罪証明アリバイブロックを使いエヴァと共にその場から去っていた。その後学園長が解散の指示を出し解散となった。

～ 第三者 side end ～

## 閑話1（後書き）

讀心術・・・アスカが創ったスキルの一つ。行橋未造の受信感度の進化版と言った感じの能力。受信感度の受信する情報を取捨選択することは出来ないと言う弱点を無くし尚且つもっとはつきりわかる様にしたスキル。名前は良いのが思い付かないので読を讀に変えて、讀心術とした。

## 第16話(前書き)

この話から原作開始です。では、ネギま<sup>ノットイコル</sup>悪平等を名乗りし夜天の王<sup>ノットイコル</sup>第16話始まりです。

## 第16話

「アスカ side」

今日は日曜日で前の日から千雨、刹那、真名の三人が泊りがけで修行に来ていた。修行は別荘でやるので日中の内は3人には守護騎士達がやっている店の手伝いをして貰った。

店の名前は良い感じの思い浮かばなかったのでリリカルなのはに出てくる喫茶店の名前をそのまま使い“翠屋”にした。店の人気も上々で、男性、女性どちらの客も多い。男性客の多い理由はやっぱり守護騎士達目当てで来る客が多く守護騎士達、特にアインとシグナムを目当てというか口説きに来る男性客が多く口説いてはフラれるパターンで。酷いときは告白してきた客の前でシグナムやアインが俺とキスしたりしてフルという方法までとる始末でそれでも男性客の数は減るところか増えてるような気がする。女性客は主にシヤマルや俺特性のアロマや美白液などを求める客と後は別荘の中の家の本を収納してある中であつた“翠屋の若きパテシエ高町桃子が教えるスイーツの本”なる本に載っていてそれを参考にして作ったスイーツを求める客が大半で、俺目当てで来るそういう趣味の客や守護騎士達目当てで来る百合の人達がごく少数ではあるがよく来るあつ！ちなみに千雨達にはちゃんとバイト代を払いましたよ。

そんな感じで家に来て泊まっていた次の日の朝、俺達は皆で朝食を食べていた。ちなみに今日の当番は俺とシヤマルだった。

「あつ！そういうえばもう直ぐ薬mつとネギがこっちに来るってさ。」

「アスカ。お前今薬味って言おうとしただろ？」

俺の発言に千雨が突っ込んだ。ちなみに俺は今では守護騎士達以

外だと千雨、刹那、真名の前では括弧を外して喋っている。

「それで、それだけなら私達に言わないだろ。私達に言うって事は何かあるって事だろ？」

「うん。と言っても別に言うほどの事でもないけどね。ただ気をつけてねって言いたかっただけだから。」

「何に気をつけるんですか？」

「あの薬味は魔力のコントロールが下手と言うか出来てないから、くしゃみで武装解除の魔法が勝手に発動して女の子の服を吹き飛ばすんだよ。だからくしゃみやらしそうになったら障壁を張るか逃げるか避けるしろって言いたかったんだ。」

「おいっ！それは本当なのかよ！？」

俺の言葉に千雨達は呆気にとられていて、早くに覚醒した千雨が聞いた。

「本当だぞ。だから気を付けろよ。」

「「「わかった（わかりました（わかったよ）。「「「」

「そういえばその、えっと、ネギだっけか？そいつの強さはどんななんだ？」

「そういわれると気になるね。」

「薬味の強さね・・・千雨がバインドとシュータだけで倒せる位の強さかな。」

「えっ。そんなに弱いのか？」

「アスカさん。確かお兄さんは魔法学校主席でしたよね？」

「ん。そうだぞ刹那。」

「それなのにそれだけでたおせるのか？」

「倒せるな。あの薬味は主アスカと違い死合いかしたことはないだろうし、魔法が危ないモノだという認識が殆ど無い。それに周りの大人に甘やかされて育ったからな。倒すのは容易だ。」

「そんなわけでシグナムが言った通りだから、基本無視する方向で最初に言った通り魔力の暴発に気をつければいけば殆ど関らなくてすむと思うよ。」

そう言っつてこの話を終わらせた。

その後は店の手伝いをしたり、別荘で修行したり、ダラダラして体を休めたりしてこの日は終わった。

～アスカ side end～

～第三者 side～

ネギは原作通り、くしゃみでスカート捲りをしたり、アスナの制服を武装解除で剥ぎ取ったりして、アスナ達につれられて学園長室まで来た。

「学園長先生!! 一体どーゆーことなんですか!?!」

「まあまあアスナちゃんや。落ち着きなさい。それでネギ君。日本の学校で先生をするとは、そりやまた大変な課題をもちうたのお。」

「は、はい。よろしくお願いします。」

「しかしまずは……。」

コンコン。

『学園長。アスカです。』

「来たようじゃのお。入りなさい。」

『失礼します。』

「アスカ!」

『久し振りだね。やくつと違った、ネギ兄さん。』

「久し振り。」

『話を中断させてすいません。学園長、話を続けてください。』

アスカはネギに対する挨拶をそこそこにアスカが来る前まで話していた話を再開させ様と促した。

「そうじゃのお。それでは改めて。ネギ君、アスカ君、君達には3月まで教育実習として働いて貰うぞい。」

「は、はいっ！わかりました！」

『わかりました。』

「ところでネギ君には彼女はおるか？どーじゃな？うちの孫娘このかなぞ？」

「ややわゝ、じいちゃんたら。」

ガスッ！！

木乃香は近右衛門の頭を何処から取り出したトンかちで叩いた。

「ちよつと待って下さいっ！アスカなら兎も角、如何してこんな子供が先生なんて可笑しいじゃないですか！？しかもうちの担任だなんて！！」

アスナの言葉を無視して近右衛門は話を進めた。

「ネギ君、アスカ君。この修行は恐らく大変なものになるじゃろお。駄目なら故郷に帰らねばならん。そしたら二度とチャンスはないがその覚悟はあるかのお？」

「は、はいっ！やります！やらせてくださいっ！！」

『僕は別に修行なんて如何でも良いですけど、教師と言う人の人生に関する仕事ですからちゃんとやりますよ。』

「……うむ、わかった！では今日から早速やつてもらおうかの

お。指導教員の先生を紹介しよう。ちなみにアスカ君の指導教員も変わってネギ君の指導教員と同じになる。」

『わかりました。』

「それでは、しずな君。」

「はい。」

そう言っしてしずなが入ってきた。

「わからないことがあったら彼女に聞きなさい。」

「よろしくね？ネギ君、アスカ君。」

「あ、はい。」

『よろしくお願ひします、しずな先生。』

「そうそう、もう一つ。このか、アスナちゃん。暫らくネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？」

「げえっ。如何してですか?!」

「まだ住む所が決つたらんのじゃよ。」

「それならアスカの所で良いじゃないですか?!」

『それは無理ですよ。』

「どうしてよ!?!」

『僕は今僕の知り合いの所に住んでいるからですよ。それに部屋の空きもないですからね。』

アスカは適当なことをいってアスナを誤魔化した。

「そういう訳で頼めんかのぉ。」

「アスナ。かわえーよ、この子。」

「ガキはキライなんだつてば!」

「これこれ、仲良くしなさい。」

「あの・・・。」

「あんたなんかと一緒に暮すのなんてお断りよ!?!」

「ふむ。如何したもののかのお。」

『学園長。アスナさんが嫌がつてますし此処は高畑先生の所に住まわせれば良いんじゃないですか？』

「そうじゃのお。高畑君には苦勞をかけるがしかたないかのお。」

学園長がそう言つとアスナはさっきとは打つて変わつていった。

「学園長！このガキは私達で面倒を見ます！」

「ふおっ。本当かのお？」

「はいっ！」

「そうか。それでは頼んだぞい。」

「はいっ！それじゃあ私達先に行きますから！！！」

そう言つてアスナ達は学園長室から出て行つた。

〈第三者 side end〉

## 第17話（前書き）

ネギま<sup>ノブ</sup>悪平等<sup>トイ</sup>を名乗りし夜天の王<sup>コル</sup>第17話、  
始まります。

## 第17話

「アスカ side」

俺達が教室の近くまで来るとしずな先生がネギに出席簿を手渡した。

「ハイ。これ、クラス名簿。」

「あ、どうも。」

「アスカ君のは。」

「それなら大丈夫ですよ。クラス全員の名前とかは覚えてますし、出席簿も新田先生から予め貰ってます。」

「そうなら良いの。それで授業の方は大丈夫なの？二人とも。」

「あつ・ちよつとキンチョーしてきました。」

「大丈夫です。」

俺は教室の入り口に仕掛けられているであろうトラップの方が気になっていて、しずな先生の言葉には適当な感じの答え方になってしまった。

「ここがあなた達のクラスよ。」

「ネギ兄さん先に入りなよ。」

俺は自分がトラップに引っ掛らないために緊張しているネギにそう言った。

「えっ！良いのアスカ？」

「良いよ。」

そう言つてネギに入るよう促した。

ネギは原作通り魔法障壁を切り忘れていたので黒板消しが不自然に止まり、それを誤魔化すために棒読みで引つ掛つた事をアピールし、そのまま足を進め仕掛けてあつたトラップ全てに引つ掛つた。2-Aは引つ掛つたのが子供のネギだと分ると騒がしくなつたがしずな先生が静かにさせた。

「それじゃあ、ネギ君自己紹介して貰おうかしら。」

「はっ、はい。ええと、ボク、ボクは今日からこの学校でまほ・  
・英語を教える事になりました。ネギ・スプリングフィールドで  
す。三学期の間だけですけどよろしくお願いします。」

「……………キヤアツア。かわいいい〜!!」「……………」

「ハイハイ。静かにして次にもう一人先生を紹介します。入つてきて。」

俺はそう言われて教室に入り教卓の前まで行き、教卓を叩き言った。

「世界は平凡か？未来は退屈か？現実 is 適当か？安心しろ、それでも生きることは劇的だ！そんなわけで本日よりこの僕、アスカ・スプリングフィールドが君達の担任兼、数学の教師だ。学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わずこの僕に相談するがよい。24時間365日私は誰からの相談でも受けつける  
！！！！」

僕は一番初めに自己紹介した時と同じ言葉に少し付け足して言った。そんな僕の言葉を何事も無かつたかのようにしずな先生は言った。

「そんな訳でアスカ君は冬休み明けからの研修の結果、まだ一応教育実習生の身分ではあるんだけど、何かと主張の多い高畑先生に代わりに担任代理という形ではあるけどこの2 - Aの担任になりました。」

「~~~~~えええええ~~~~~!!!」

その後、ネギの周りに人だかりができ、俺は巻き込まれない様に離れて、千雨達とその人だかりを傍観していた。そして、原作通りにこの日の授業は終わった。

『それで、如何だったネギは?』

「ふんっ。期待はずれだな。良くあれで天才だと言えてものだ。」

あれで天才なら貴様はなんと言い現せば良いのだろうなあ、アスカ。

『そこまで僕を気に入って貰えてるなら嬉しいなあ、エヴァ。』

俺は放課後、屋上でエヴァと話していた。

「まあな。貴様とはこれから先、長い付き合いになるからな。」

『そうだねえ、だからこれからよろしくお願いしますよ、お友達。』  
ディアフレンド

そうして話していると千雨が来た。

「アスカ。これから教室に来れるか?」

『行けますけど。何かあるんですか?』

「お前なら、受信感度とかで分ってるだろ?」

『いやいや。あれは通常はOFFにしてるから分らないよ?』

「そうなのか?まあ、その辺の事は置いて教室行くぞ?」

『わかったよ。それでエヴァは如何する？』  
「私も行こう。暇だしな。」

そう言って千雨に連れられ教室に向かった。

＼アスカ side end 〵

## 第17話（後書き）

正直、この作品はアスカ side か、第三者 side が中心なのでネギ side で書く事が無いかもしれませぬ。あつたとしても短いものになると思います。というかなります。

それと、今週はテストが2、3日続けてあるので更新が遅くなります。

## 第18話

く千雨side

ネギとか言う薬味みたいな名前のアスカの兄の歓迎会と、アスカの昇進(?)祝いのパーティーの準備をして、神楽坂が薬味の方を買出しと一緒に買った。アスカの方は私が自分から呼びに行くと言ってアスカを呼びに言った。職員室に行ったがアスカはいなくて仕方なくアスカとつながっているラインを辿り屋上に行った。屋上でアスカはエヴァ(本人にそう呼べと言われた)と話していた。私はアスカとエヴァを連れて教室に戻り、教室の前にいた神楽坂達と教室に入った。

パーティーでは薬味の周りに2-Aの殆どの生徒が群がっていて関わり合いになりたくなかったのでアスカと刹那、真名、茶々丸、そして私の5人で話していた。

「なんだあのガキはっ！魔力制御は碌に出来てないし、今だって平気で人前で魔法使ってるしっ！あゝマジでディバインバスターを、いや、ここはスターライトブレイカーをぶち込んでやるっかっ！」

『この肉まん美味しいっ。』

「こっちの餡蜜も美味しいよ。ほら、あゝん。」

『どれどれ。(パクッ)あっ、本当だ。』

「あっ、あのこっちの桃マンも美味しいですよ。あっ、あゝん。」

『あゝん。(パクッ)本当だ、美味しい。』

「って、私の話を聴いてるのかっ！それにその気持ち悪くなる様な食べ方はヤメロっ！！」

私は何時もより若干高いテンションで言った。ちなみにアスカの肉まんの食べ方は、中身をブビューッ、って音をたて中身を出して食

べる食べ方だ。

『聴いてる聴いてる。なっ、真名、刹那？』

「「ああ(はい)。」」

「なら私の言っていた事を言ってみろっ！」

『あれだよ、あれ。千雨が僕の事を好きだって話でしょ？』

「全然聴いてねえっ!!！」

〈千雨side end〉

〈第三者side〉

「千雨さん、落ち着いて、落ち着いて。って酒臭いっ！」

千雨を抑え様とした刹那がそう言った。

「酒なんか飲んでねえよっ！こんな学生が開くパーティーで酒が出るかよお。(ヒック)」

「いやっ！明らかに酔ってますよねっ！」

「だあかあらっ！酔って無いってっ。(ヒック)これはあれだ、あれ、エヴァから貰った普通のとは味の違う葡萄ジュースを飲んで体が温かくなって、気分が高揚しているだけだっ。(ヒック)」

「千雨さん、それを世間一般では酔ってるって言ってますっ！それにエヴァンジェリンさん自分は関係ないって顔してますけど貴女が、原因なんですからっ！」

「そう言っつなよ刹那。それに他のアスカ達を見る。」

刹那と千雨はアスカと真名の方を見た。

「ふむ。これはなかなか美味しいね。」

『だよねえ。』

「アスカ。いや、アスカ先生と呼ぶべきかな？もう一杯どうだい？」

『じゃあ、ありがたく頂くよ。それと何時も通りアスカで良いよ。』

てな感じで飲んでいた。

「つて、アスカさんに真名、何飲んでるんですかあっ！！」

「そうだぞつ、私にも飲ませるおっ！！（ヒツク）」

「そうじゃないでしょ千雨さん！！」

「そんなに大声出して如何したんだい刹那？」

『刹那、そんなに大声出して何か良い事でもあったのかい？』

こんな感じでワイワイとやっていてパーティーは終わった。それと飲酒などはアスカの認識阻害の魔法や色々なスキルを才能の無駄使いだと思っほほどに使い、他の2-Aの生徒にはれる事は無かった。

ちなみに、ネギとかの行動は全て原作通りで、唯一違ったのは、ネギが読心術の魔法で読んだ高畑の“熊パン”と思っていた所の思考が、アスカのスキルによって、“ハアハア、アスナタンのくまパン・・・”と何処かの変態みたいな考えに変わっていた事ぐらいが原作との違いだった。

～ 第三者 side end ～

第18話(後書き)

## 第19話（前書き）

ネギま<sup>ノットイコール</sup>悪平等を名乗りし夜天の王<sup>ノットイコール</sup>第19話。話がグダグダな  
気がするけど始まります。

## 第19話

↳ 第三者 side

「これが今日の伝達事項です。」

今日は重要な伝達事項があり朝早くから教職員達は集まっていた。もちろんその中にはネギも含まれているが、この場には子供先生はアスカしかいなかった。

「アスカ君。ネギ君は如何したのかな？」

「さあ？たぶん今日の早朝職員会議の事を忘れていて、尚且つ寝坊でもしてるんですよ、新田先生。」

「むつ。やはりそうなのだろうか？」

「如何でしょうね。もしかしたら、僕が出るから自分はお出なくても良いとか考えているかもしれないよ。」

「アスカ君。」

キーン、コーン、カ〜コーン。

『それじゃあ、チャイムも鳴りましたから教室に行きますね。ネギ先生が来たらちゃんと叱ってやってくださいね。』

そう言っつて、アスカは2 - Aの教室に行った。

そして場所は変わり2 - Aの教室。

「それでは一時間目の授業を始めます。テキスト78ページを開いてください。」

The fall of Jason flower . . . Spring came . . . Jason the . . . . .」

とネギは教科書の英文を読んでいった。

アスカはそれを窓際に椅子を置いてそれに座って授業を見ていた。

「それじゃあ、今のところ誰に訳してもらおうかなあ。えーっと  
．．．それじゃあアスナさん。」

「なっ、何で私に当てるのようっ!？」

「えっ、だつて。」

「普通は日付とか出席番号とかで当てるでしょ!」

「えっ、でもアスナさんあじやないですか。」

「アスナは名前よっ!」

「それに感謝の意味を込めて当てました。」

「何の感謝よっ!！」

「要するに解らないんですわねアスナさん。」

「なっ!」

「では、ここは委員長であるわたくしが代わりに訳して差し上げ  
ましょうか?」

「わ、わかつたわよ訳すわよ。えーと。ジェイソンが．．．花の  
上．．．に落ち、春が来た? ジェイソンとその花は．．．えっと．．  
．高い木の上で．．．食べたランチで．．．骨．．．は百本? え  
ーと、骨が．．．木の．．．そばで．．．．．．．．．．．．．．．．  
。」

「アスナさん英語ダメなんですわね。(笑)」  
「なっ!」

ネギは訳の分からない理由でアスナを当て、アスナはそれを必死  
で訳そうとしたが、ネギがそれを見てアスナをバカにして、それに  
乗るように周りもアスナをバカにした。それを見ていたアスカはム

力ついて、ネギに特製のスーパーボールを、アスナをバカにする発言をした数人の2・Aの生徒にはチヨークを投げつけた。

「ゴフツッ!」

「キヤッ!」

「ねえ、君達。何ふざけてるのかなあ」

ネギは気絶した方がましだと思っほどの痛みを、チヨークを投げられた者はデコが赤くなっていた。そして、後から響いたアスカの声はアスカと一緒に居る時間の長い、千雨、刹那、真名、エヴァ、茶々丸の5人が聴いた事も無いほどに冷たく静かなそれでいて良く通る声だった。

「ねえ、ネギ教員。あなたは今自分が何をしたかわかっていますか?」

「ゲホッ。アツ、アスカ何を・・・」

「その顔では自分が何をしたかわからないようですねえ。アンタは生徒を侮辱するという教師としてやってはイケない事を行ったんだよ。」

「だつ、だつて本当の・・・」

「本当の事だからあ?本当の事なら何を言っても、やっても良いってか。なら俺もお前に本当の事を言っつてやるうか、お前みたいな奴は教師なんてせずに、しようと考えずに故郷に帰れよ。」

「えっ?」

「どうして?ってか。そんなことも分からないから帰れってって言っただよ。」

アスカはネギを見下ろしながら言った。そして今度は生徒の方を向いていった。

『あなた達にしてもそうだ。こいつに同調し、一緒になって人を、頑張った人間をバカにして授業を妨害するからチヨークをぶつけたんですよ。それじゃあ、気分を害したから俺は出ていく。この後の俺の授業で同じような事をしたら、宿題の量をクラス全員2倍にして、期限までに一人でも出さなければ全員数学の評価を1にするぞ。』

そう言つてアスカは教室を出た。

〜第三者 side end〜

〜千雨 side〜

アスカが教室から去つた後、空気は重く、とても授業を再開できる雰囲気ではなかった。

私は刹那、真名、エヴァ、茶々丸は思念で話した。

物凄く怒つていたなアスカの奴。

ああ。あんなアスカ見たことがないよ

私ものです。あんなに冷たく底冷えするような声ではな話すのを初めて見ました。

たぶんあれは、今まであいつがため込んでいたものだろお。

だけどよお、あいつは他人に色んなモノを押し付けるスキルを持ってるだろ？

そうだな。だが、あいつは優しいからな。向こうにいた時は周<sup>敵</sup>りの魔法使いに押付けられただろうが、こちらに来てからはあいつの周りは殆んどが一般人だからな押し付けられなかったんだろ。

なるほど。それで今、あのガキがバカな事して、それにほかの奴らが同調して、堪忍袋の緒が切れたつと。

たぶんな。

それでどうする？

如何するとは？

アスカの事だよ。あのままじゃ拙いだろ。

そうだな。

こうして私たちはアスカを元気付ける方法を考えて、何個か私たちと守護騎士達で放課後アスカが帰宅後、別荘でそれを実践しどうにか元に戻した。

ちなみにアスカの授業は物凄く静かだったとだけ言っておく。

く千雨 side ends く

## 第20話（前書き）

ネギま<sup>ノブ</sup>〜悪平等<sup>ノブ</sup>を名乗りし夜天の王〜第20話始まります。



そうしてネギは高等部の生徒に囲まれ揉みくちやにされた。揉みくちやにしている高等部の生徒の一人にアスナがボールをぶつけ、少しの間言い合いをして、乱闘になりかけた時、

『何しているんですか、あなた達は？』

「アスカ君！」

「もう一人の子供先生よお！！」

そう言っ て高等部の生徒はアスカを揉みくちやにしようとしたが、

ドッ！

アスカの震脚にビックリして皆立ち止まってしまった。

『あなた達はウルスラの高等部ですね。こんな所で中学生相手に何してるんですか？見つとも無い。』

「うっ。」

「そうよっ！そうよっ！」

『あなた達もですよ。』

「なっ、何でよっ！」

『例えばどんな事情があるにしても暴力を振るえば、よくて新田先生の説教、下手したら停学ですよ。』

「そんな・・・。」

『そんな訳でウスラの生徒さん。お引取り願いまししょうか？でないと、僕が来る前からそこで此方を除き見ている高畑先生に怒られますよ？』

アスカの言葉を聞いて高畑が出てきた。

「よく気が付いたねアス力君。」

『よく言いますね。そんなあからさまに気配を隠してい無いくせに。』

「ははっ。そうだね。それで、君たちそろそろ教室に戻った方が良いんじゃないかい？」

「あつ、はい。」

そうして高等部の生徒は帰っていった。

その後2 - Aの生徒は着替える為に教室に戻った。

「ねえねえ、アス力君で凄くない？」

「うん。」

「確かに。この前怒った時はかなり怖かったけど、それでも勉強で解らない所は5教科どれでも教えてくれるもんねえ。それに悩みとかも聞いてくれるし。」

「えつ、本当にアス力君に相談しに行ったの?!」

「うん。それがさあ、下手に誰かに聞いて貰うよりよっぽど頼りになるよ。」

「それにあの震脚は凄かったアルヨ！」

「へえー。ウルティマホラ優勝者のくーふえがそう言うならよっぽど強いんだね。」

「それに比べネギ君はちょっと情け無かったかなあ。」

「でも10歳なんだからしよーが無いじゃーん。」

「なんなんですの皆さん。あんなにネギ先生のこと可愛がっていただくせに。」

「でもねえ。」

「それにもう直ぐ期末だし色々と相談できる方が良いしねえ。」

そんな感じで話している中に珍しく千雨が意見した。

「お前等忘れてるかも知れないけど。アスカも10歳なんだぞ。」  
「わあー。長谷川さん、珍しいね話しに入ってくるなんて。」  
「ほつとけ。」  
「でも、そうだよなえ。アスカ君も10歳なんだよな。」  
「そんなことより屋上でバレーでしょ。」  
「おつと。そうだった。」

そうして2 - Aの生徒が屋上に行くときさっきの高等部の生徒がネギを捕まえて屋上にいた。そしてまた2 - Aとの口論が始まった。

「みつ、みなさん落ち着いてください！此処は両クラス対抗でスポーツをしたら如何ですか？」

「いいわy・・・」  
『何言ってるんですか？ネギ先生。』

高等部のリーダー格の子が返事している途中にアスカがわって入ってきた。

「アツ、アスカ。如何いうこと？」

『ネギ先生。如何もこうも、この場は2 - Aの授業で使うんですから此方が先です。』

「でつでも！」

『でもではありません。それに、その人達は授業を勝手に休んでこんな所に来ているんですから。』

「どつ、如何してそれを。」

『そんな訳で、もうそろそろですね。』

アスカの言葉の後、屋上の扉が開き高等部の先生が来た。

「コラー！ツ！貴様等こんな所にいないでさつさと教室に戻らん

かぁー！！さつさとしないと赤点にするぞおー！！  
「「「「「ごめんなさいいいい！！」「」「」「」

先生に一喝され高等部の生徒は戻っていった。

「アスカ先生。内の生徒がスイマセンツ！」

「いえ。気にしないで下さい。」

「わかりました。私はこれで。」

そう言っ て高等部の先生も帰っていった。それを見送った後アスカは授業を開始させた。

『それでは体育の授業を始めます。』

その後は何事も無く一日が終わった。

～ 第三者 side end ～

## 第20話（後書き）

書いてて何かグダグダになりましたが何とか書き終わりました。

## 第21話（前書き）

サブタイトルの（前編）を外しただけです。

## 第21話

↳ 第三者 side

惚れ薬事件の他にもネギは色々と問題を起こした。アスカは自分に実害の無いものは全て無視して、それでも溜まるストレスは近右衛門と高畑に押し付けながら真面目に教師の仕事をしている為、他の先生の印象がネギより良いアスカは今、学園長より最終課題を出されていた。

『最終課題ねえ。もしかして宣戦布告したのにまだ僕の事“立派マキな魔法使い”にしようとしてるのかねえ。まっ、見るだけみますか。』

そう言ってアスカは中身を確認した。そして課題は原作とは少し違い“次の期末試験の2 - Aの順位を上位3位以上にする”という課題だった。

『おいおい。これなんて無理ゲー？つというか本当に無理じゃね。でもまあ、やってみるか。』

そう言ってアスカは教室に向かった。

「えーと皆さん今日のHRはもう直ぐ期末試験なので大勉強会にします。」

「ネギセンサー何ですかあー。」

「実は上位3位以上にならないと（僕が）大変なことになります！だから皆さん猛勉強してください！」

「はーい！提案提案！ー！」

「はい！桜子さん。」

「英語野球拳が言いたいと思いますー！」

「それじゃあそれでいいk・・・」

ネギの言葉を、ネギがHRを進める様子を見ていたアスカが遮った。

『湯っ！！！！』

ドンツ！！

アスカは一瞬で教室に防音と認識阻害の結界を張り、めだかボツクスの阿久根高貴のやった様に肺活量＋震脚の合わせ技をして生徒を黙らせた。

『あはっ。ネギ先生なに了承しようとしてるんですかあ？』

「だって折角提案してくれたから。」

『野球拳て何か知ってますう？』

「えつと・・・」

『知らないのに了承しようとしたんですかあ。まあ、知ってたらそんなことしないか。それで桜子さん、先の提案冗談ですよねえ？』

アスカは桜子に笑顔なのに全く笑ってない顔を向けた。

「あつ、ははは。そつ、そう！じよ、冗談だよ！！」

『ですよねえ。他の皆さん、今日は普通に勉強することにしますけど良いですよねえ？まあ、嫌だと言ってまた変な提案したら“O・H A・N A・S H I”でもしようかと思いましたよ。（ボソツ）』

アスカは最後の方の言葉を小さな声で呟いたが、教室が静かだったのでその言葉はクラス全員に聴こえていて、全員顔を青くして震

えていた、特に言葉の意味を知る千雨達、アスカと公私共に親しい者たちは顔を真っ青を通り越して真っ白だった。

『皆さん分つてくれた様なので、勉強を開始してください。』  
「「「「「「「「はっ、はーーーーい!!」「「「「「」

そうして2 - Aの生徒はアスカの只ならぬ秀囲気に圧されながら勉強に励んだ。ちなみにネギはアスカにビビって無言だった。

〜第三者 side end〜

## 第22話

（アスカ side）

昨日の夜、原作通りネギ達は噂の魔法書を窃盗する為に図書館島に住居不法侵入して行方不明になった。こうしてみるとネギって結構普通に犯罪を犯している気がする。ちなみにこの時俺は、刹那から連絡が来て、焦っている刹那をなだめ、その刹那を家に呼び、刹那の代わりにネギたちにシヤマルに頼みサーチャーを付け監視し、ポストバカレンジャーである刹那と刹那が来るまでに呼んでおいた千雨と真名に勉強を教えていた。

『ふうー。さて授業にでも行きますかあ。』

そうやって俺はティーカップに残っている紅茶を飲み干し授業の用意をして職員室を出ようとした。

「アスカ先生。」

『はい。なんですか新田先生？』

「ネギ先生を知りませんか？」

『さあ？知りませんけど。』

「何処に行ったのだろうか？」

『大方、一部の2-Aの生徒と、噂になっている頭の良くなる魔法の本でも探しに行ったんじゃないですかあ。』

そう俺は本当の事を新田先生に言った。

「ははは。まさか、さすがにそんな物を探しに行くほど頭の悪い子達じゃないでしょう。」

『それもそうですね。なんでしたら学園長にでも訊きに行つて如何ですか?』

「そうですね。もしかしたら学園長の方に何かしら連絡が行つてるのかも知れませんかなあ。」

そう言つて新田先生は学園長室に行つた。それを見送つた後、俺は教室に向かつた。

『あー、それでは授業を始めるう。席の先頭の人は自分の分のこのプリントを取つて裏に回しなさい。裏の方で余つたら空いてる席に置いてねえ。それと時間内に終わつたら静かにして各自好きな事をしてなさい。』

俺は何時もの括弧を付けて喋りに加え、やる気無さそうに語尾をのばして喋つていた。

『ああ、裏まで回つたなあ?回つたなら初めえ。』

「あのつ、アスカ先生!」

『なんだあ雪広お?センサーのプリントが出来ないつて言つのかあ?』

「違います!」

『なら座つてプリントやりなさい。』

「アスカ先生は、ネギ先生達が行方不明つて知ってるんですか?」

!??」

『知つてますよお?』

俺はそう言つて面倒くさそうに返事をした。

「なら心配じゃないんですか!」

『いえ。全然。だつて学園長が仕組んだことですからあ。』

「それは如何いうことですか!？」

『行方不明になった人達は1人を除いて成績が思わしくない人達で、その子達に勉強させるために一時的に行方不明として彼女たちを隔離し、勉強させてるんですよ。』

「それは本当ですか!？」

『本当ですう。だから早く席についてプリントをしてください。でないと、テストで幾ら良い点をとっても通知簿の成績を1にしますよお?』

「わかりました。」

そう言って雪広は席についてプリントを始めた。それから暫らく経って、

『はあい、終了う。それじゃあ、雪広、柿崎、朝倉、早乙女、那波の5人は前に出て問題の答えを書いて下さいい。』

5人に黒板に問題の答えを書いて貰いその答えあわせをした後、自習にして職員室に戻り、この学園都市の何処かの自動販売機に売っている、綾瀬が何時も飲んでいる謎のジュースシリーズを飲んで次の授業に備えた。

＼アスカ side end＼

## 第23話

〈第三者 side〉

期末考査の最後以外は原作と少し違っていた。一つは宮崎のどかと、早乙女ハルナの二人はちゃんとテストを受けていたこと。二つ目は行方不明組み無しで、他のクラスと同率3位であった所が原作との違いだった。

そして考査が終わった後、アスカは守護騎士達と千雨、真名、刹那、エヴァ、茶々丸、チャチャゼ口達と考査の賭けでゲットした食券25000枚を使って外食をした。

そんなこんなで3学期の終了式。アスカとネギは正式な教員になった。

〈第三者 side end〉

〈千雨 side〉

マジありえねえ。あの薬味がマジで教員になりやがった。10歳のガキを教員として働かせるとかマジありえねえ。そういえばアスカも10歳だが、あいつは非常識な存在だが常識がある分あの薬味より何万倍もマシだ。ヤベエ、考え出したら限が無くて気分悪くなつて来やがった。

「どーしたんですか、長谷川さん寒気でも・・・？」

「いえ・・・別に。」

「そうですか。」

「気分が優れないので帰ります。」

「えっ！ちよっと長谷川さん。」

「ああ、千雨さんですか。アスカ先生や1部の人以外には基本あ  
あですから放つとしても平気です、ネギ先生。」

『待つて下さい、長谷川さん。』

私が後ろで薬味や綾瀬が言っていることを無視し教室から出て行  
こうとした時、アスカに呼び止められた。

「なんですか、アスカ先生？」

『少しかがんで下さい。』

アスカの指示通りアスカの顔の高さに自分の顔が近づくように少  
しかがむと、アスカは自分の額を私の額にくっ付けた。

「なっ！何するんですか?!」

『何って熱を測っただけですよ。よかった熱は無いようですね。』

「他にも測り方はあったでしょ?!」

『まあ、気にしないで下さい。それとこれ栄養ドリンクです。良  
かったらどうぞ?』

「ありがとうございます。」

そう言って私はアスカ特性の栄養ドリンクと、他にばれない様に  
それについて来た紙を握って寮の部屋に帰った。そして手渡された  
紙に書いてある内容を読んだ。

「えっと、薬味が勝手に部屋に入ってくる可能性があるんで鍵は  
閉めること。おいおい、まさかそんな事・・・あるかも。ちゃんと  
鍵掛けよ。」

そうして私は部屋の鍵をかけた。

く千雨side endく

くアスカsideく

千雨が帰った後、それを追って行くこととするネギを止め、HRをさっさと終わらせた。

『さて、千雨はちゃんと紙に書いてある助言をきいたかな。』

俺は、職員室で帰る準備をして、千雨の部屋に向かった。そして、千雨の部屋の前でネギにあった。

『やあ、ネギ兄さんここで何をしてるのかな？』

「あつ、アスカ。長谷川さんの様子を見に来たんだけけど呼んでも返事がないから、魔法で鍵を開けようかかかって。」

『変態・・・いや、最低だね、ネギ兄さん。それ犯罪だろ？』

「えつ、どうして?! 僕はただ・・・。」

『心配だから鍵を開けて中に入るの?』

「そつ、そつだよ。」

『でも犯罪は犯罪だろ? 特に親しくない女性の部屋に無断で入るのは最低な行為だよ。』

「でつ、でも・・・。」

ネギは何か言おうとするが、それを遮り言った。

『それにそんな事したら、立派な魔法使いにはなれないよ。それは嫌だろ?』

「えつ、そつなの?!」

『そう、だから帰りなさい。』

「でも、パーティが・・・。」

『それは、僕の方から伝えとくから。』  
「わかったよ。」

そう言ってネギは帰っていった。その後、千雨を思念で呼び出し、一緒にパーティーに行った。

＼アスカ side end 〵

## 第23話(後書き)

しまった………楓や千鶴をどのタイミングで入れれば良い  
か分らない。

## 第24話(前書き)

今回は短いです。では、ネギまノットイコール悪平等を名乗りし夜天の王ノットイコール第24話、始まります。

## 第24話

春休みをささみ新学期になった。春休みにちよつとあつた様な無かつた様な感じでそれはまた今度の機会に語るとしよう。

そんな訳で3-Aの教室。

「……三年！A組！！アスカ&ネギ先生ーっ！！」

「アホばつかです……」

「バカどもがつ……」

「えつと……改めまして、3年A組副担任になりました。ネギ・スプリングフィールドです。来年の3月までの1年間、よろしくお願ひします。」

「正式にこのクラスの担任になった、アスカ・スプリングフィールドです。若輩者だが皆さんからの相談を受け付けていますから遠慮なく来てください。よろしくお願ひしますっ。」

「……はーいっ！よろしくーっ！！」

その後は原作通りネギがエヴァからの視線に気付いたり、身体測定のための着替えをのぞいたり、桜通りに倒れていた佐々木に残る魔力に気付いたりして、今は原作通りネギとエヴァがおっかけっこをしていた。

「ははは、世の為、人の為に働くのが魔法使いの仕事”だつて。よい感じに元老院バカ共に洗脳されてるなあ。」

「仕方ありません、主アスカ。あの薬味は元老院蛆虫共の大切な傀儡ですから。」

「そうだぜアスカ。老害共は自分達の権力向上の為に、英雄の息子という名の傀儡が欲しいんだからな。」

『そうだなあ。それにしても武装解除されたエヴァの格好なんかエロいな。つともう直ぐ神楽坂が来る頃か。』

そう言つて俺は、ドッベルゲンガー肉体変化を使い、肉体年齢を18歳位まで大きくして、髪は赤めにして、刀語の左右田右衛門左衛門“不忍”のお面を付け、エヴァの下に降り、エヴァを蹴ろうとしている神楽坂の足をつかんだ。

「アンタだれよっ！」

「不言。貴女に言う必要が無い。それで大丈夫ですか姫様？」

俺はエヴァにそう訊いた。

「ふんっ。大丈夫だ、右衛門左衛門。」

「不安心。そんな格好で言われても説得力がありません。これを。」

俺はそう言つてエヴァにコートを差し出した。

「ああ、ありがとう、すまん。」

「不及。礼には及びません。」

「エヴァちゃんっ！アンタが犯人なのっ！それとそいつは誰っ！？」

「ふふふ。そうさ。私が今回の犯人さっ。それとコイツは左右田右衛門左衛門。私の従者（という設定）さっ！それで、ぼーやお姉ちゃんが着てくれたが如何するんだ？」

「っ！それは・・・」

「不聞。聞く必要はありません。帰りましょう。」

「如何いうことだ？」

「相手にする価値も無いからです。」

「それもそうだな。ふんっ 興奮めだよーや。主席という位だからどんなものかと思えばたいした事は無いな。これなら弟の方が強かったぞ。」

そう言って、エヴァと、茶々丸、俺はその場を後にした。

## 第24話（後書き）

何故かアスカを左右田右衛門左衛に変装させてしまった。左右田右衛門左衛門の口調がいまいち分らないけど……こんな感じだったはず。

何か最近内容とか、書き方とかが適当になってる気がする……。頑張らなければっ！！

## 第25話（前書き）

あまりの暑さにダウン寸前の煌識です。では、ネギまノットイコール悪平等を名乗りし夜天の王、第25話、始まります。

## 第25話

（アスカ side）

エヴァ達とネギで遊んだ次の日、原作通りネギはエヴァに怯えて、登校拒否をしようとしていたがアスナに担がれ登校してきて、そのネギにエヴァは堂々とサボリ宣言をして教室に行かずに屋上に行った。その後は、ネギがパートナーがどーとか言ったり、2 - Aの殆ど（千雨やエヴァ達を除く）生徒が“ネギを励ます会”とかいって風呂場でネギにセクハラしたり、カモとかいうネギのペットの淫獣がきたりした。ちなみに俺は我かんせずという風に普通に授業をしたりしていた。

次の日は淫獣が宮崎をネギと仮契約させようとしていたのをアスナと止め、淫獣に致死武器スカイデッドで古傷トラウマや虫歯を開き、アスナに淫獣に対する注意を促しその場を後にした。ちなみに淫獣を止める際は原作と違い俺が踏みつけて止めた。その際カエルを踏み潰した様な音が聞こえたが無視した。

そしてまた次の日。

『ふあゝ。ねみい。』

「おはよう、アスカ。なんか眠そうだな？」

『ああ、おはよう千雨。昨日、夜遅くまで陰陽道の練習とかをしていて気づいたら5時頃だったんだよねえ。』

「はあ？ 陰陽道の練習ってなんで？」

『いやあ、この学園に淫獣が入ってきてきてねえ。それで、その淫獣に腹下しやら、風邪に、水虫、それに、オリジナルの呪術をかけるためにね朝まで頑張ってたわけよ。』

「淫獣!?!」

『そつ、淫獣。』

「消<sup>殺</sup>さねえの?」

そう言った千雨に俺は淫獣<sup>カモ</sup>について説明した。

『まあ、下着とか盗まれないよう頑張れよ。あつ、それと<sup>カモ</sup>この事、刹那達にも言っておいて。』

そう言って俺は職員室に向かった。

〈アスカside end〉

〈茶々丸side〉

今日もいつも通り、アスカ先生以外の授業をサボタージュしたマスターについて一緒にサボタージュし、部活動である茶道部でお茶をたてていました。そして家までの帰り道。

「ネギ・スプリングフィールドに助言者がついたかも知れん。暫くは私の傍から離れるな。」

「はい、マスター。」

「おーい、エヴァ。」

「・・・タカミチ何の用だ?」

「学園長が呼んでるよ。一人で来るようにだつてさ。」

「わかった。茶々丸人目のある所を通って先に帰ってる。」

「はい、マスター。」

「それでは行くぞ、タカミチ。」

「ああ。」

「お気をつけて、マスター。」

そう言つて、マスターと高畑先生は学園長室に向かいました。

私はそれを見送つた後、私は猫の工サを買い、尾行しているネギ先生たちを無視して歩き、工サを野良猫達の所へ持つていく途中に、木に引つ掛かつた風船を取つたり、歩道橋を渡るのに苦労しているお婆さんを負ぶつて歩道橋を渡つたり、川で流されている猫を助けたりして、野良猫達の所に行き工サをやつた。

「こんにちは。ネギ先生、神楽坂さん。・・・油断しました。・・・でもお相手はします。」

私はネギ先生たちと少し話した後、戦闘を開始しました。アスナさんはネギ先生の魔力補助による身体能力向上を抜いてもその動きは素人のモノではありませんでした。ですが、向上した身体能力に振り回される形になっていたのでその攻撃を避けるのは簡単でしたが、神楽坂さんの攻撃に気を取られ、ネギ先生の攻撃がよけきれない位置にきて、そこに私に向かって魔法の射手がとんできました。

「追尾型魔法多数接近。避けきれません。・・・すみません、マスター、アスカさん。私が動かなくなつたら猫の工サを・・・」

『諦めちゃダメだよ。茶々丸。』

そう言つて私と魔法攻撃の間に人が割り込んできました。

〈茶々丸 side end〉

〈アスカ side〉

今日が茶々丸襲撃の日だと思ひ出した俺は、パラサイトシーイング欲視力でアスナの見

ているものを視て、茶々丸と戦闘中であることを知り、アリバイブロック腑罪証明でその場所に駆けつけ、茶々丸と魔法攻撃の間に割って入った。

「やったかつ？ゴフツ」

「カモ君！？」

カモがそう言って血だるまになった。そんなカモを見てネギが心配し、俺はそれを無視して茶々丸に話かけた

『大丈夫かい、茶々丸？』

「はい。どこも異常はありません。ありがとうございます。」

『よかったあ。ここは良いからさっさと行け。』

「わかりました。このお礼は必ず。」

『期待してるよ。』

そうして茶々丸はこの場から飛んで逃げた。

「アスカ何をしたのよっ！！」

『何もしてませんよ。私はあくまで何もしてません。こんなのはただの不慮の事故ですから。』

「そんなわけないでしょっ！！」

『それに何かしたのはアナタたちの方だろ？茶々丸を殺そうとしたくせに。』

「どういう事よっ！！」

『どうもこうも、あなた達は茶々丸を殺そうとした。ロボットだから壊しても大丈夫。後で直せるから？とか考えていたんだろっけど、記憶回路を壊されたらいくら見た目を元通りにしてもそれは茶々丸じゃなくなるんだ。そうしたら、おめでどう、それで晴れて君達は犯罪者だ。』

俺の言葉の意味を理解したのか、アスナたちは青ざめていた。俺はそれを無視してカモの傷を死なない程度まで直して、アスナ達をおいて家に帰った。

アスカ side end

## 第25話（後書き）

最近、主人公に持たせる魔道書は“夜天の書”じゃなくて、“ナ  
コト写本”や、“アル・アジフ”とかにすればよかったかなあと  
考えて、でも、詠唱や術の名前が殆どわからない事に気づき魔道書  
の変更をやめました。

それと、23話の後書きに書いた事に意見をくれた方、ありがと  
うございます。

では、次回の更新は金曜日位になるようがんばります。

## 第26話(前書き)

金曜日には更新できませんでしたが、ネギまノットイコール悪平等を名乗りし  
夜天の王王第26話、始まります。

## 第26話

ネギ達による茶々丸襲撃事件はアスカの不慮エンカウンターの事故によってカモが死ぬ寸前の重症を負い、その傷をアスカが死なない程度まで直すという結果で終わった。その後、ネギ達は死なない程度まで直ったカモを抱えて寮に戻り、カモの治療をして、後は原作通りの会話の後、ネギの家出、そして長瀬楓との修行(?)をしてアスナ達の下に帰った。その間アスカはというと、本屋によってラノベを買って家に帰り、守護騎士達とご飯を食べ、買ってきたラノベを読み、その途中にネギの家出を思い出し、長瀬の実力をはかる為にネギ達がいる森に向かい、ラノベを読みながら観察していた。

「へえ〜。あの苦無の命中率と、分身の数は流石と言つべきだね。でも、俺の気配に気付けなかったところは・・・まあ、知られざる英雄ミスターアンノを使うってし仕方ないかあ。じゃあ、これは如何かな。」

そう言つてアスカは長瀬達に殺気を向けた。

「っ!!!」

「如何したんですか長瀬さん？」

「っ、何でもないのでござるよネギ坊主。さっ、続きをするでござる。」

そう言つて楓はネギと一緒に夕ご飯の食材確保の続きに向かった。

「へえ。この位の殺気には当然、気づくかあ。でもネギはあの程度の殺気にも気付かないなんて、まだまだだなあ。」

そう言つてアスカは1度夕食を食べに帰り、ネギが寝た頃を見計

らってまた戻ってきた。そうすると楓がアスカの殺気を感じ取った場所でもウロウロしていた。

『こんばんわ長瀬さん。良い月夜ですねえ。』

「っ！・・・アスカ先生こんな場所で如何したでござるか？」

『わかっているのでは？』

「では、昼の殺気はアスカ先生が？」

『そうですよ。』

そう言って二人は暫く見つめあって、アスカが言った。

『って、冗談ですよ。（笑）僕は帰りますよ。ネギ兄さんのことよろしく願いますね。』

そう言ってアスカが去った後。

ドサッ

「凄い気当たりでござった。あのままやっていたら・・・」  
今は考えるのはよすでござる。」

そう言って楓はテントに戻った。

第26話(後書き)

## 第27話（前書き）

本当は土曜日に更新できるはずが投稿する前に消してしまい、もう一度書くために、やる気とか起こさせるのに時間がかかりました。それではネギまノットイコール悪平等を名乗りし夜天の王ノットイコール第27話始まります。

## 第27話

ネギはあの後アスナ達の下に帰り、次の日にエヴァに渡す果たし状を書いて寝た。

次の日、ネギは学校に来て職員室にも寄らずに2-Aの教室に向かい、エヴァを探したが居らず後から来たアスカにエヴァが風邪で休みであると聞いて、アスカの制止を聞かずにエヴァの家に向かった。そしてネギは原作通りエヴァの家に行き、エヴァに色々してエヴァを怒らせ家から叩き出された。ちなみにネギが来た後、茶々丸は薬を貰いにシャマルの所へ行っていた。ネギが授業をサボってエヴァの所へ向かった後、アスカは学園長に連絡し、その学園長からネギの代わりに授業をしてくれと言われ、アスカは押付けても押付けても限の無いストレスで切れて学園長室に行き学園長にO H A N A S H Iをしてその提案を取り下げさせた。

そしてまた次の日、エヴァは珍しく全教科の授業に出席していた。そんな事があったその夜。

『へえ〜。先に噛んでいた佐々木を使って、近くにいた、明石、和泉、大河内の三人を傀儡にして4人いっぺんに操るなんて、流石は闇の福音いや、人形使いといったところだねえ。』

「ふん。煽っても何も無いぞ?」

『いやだなあ。別にお世辞を言ってるわけじゃありませんよ。』

「そうか。そろそろ坊や来るから行くとするか。」

『僕は離れてこの茶番をみますよ。』

「何だ、坊やに助太刀しないのか?」

『僕がそんな事すると思いますかあ?』

「それもそうか。」

そう言っただけでエヴァは原作でエヴァの居た位置に向かった。その後、

原作通りエヴァに誘われてネギはボロボロのカモを引き連れエヴァの下に来て、その後はほぼ原作通りだが少し違うのは、エヴァの方はアスカ達と何回も死合いをした事により昔の感覚を思い出していたので、原作よりもっと余裕をもってネギに攻撃していた。

「ラス・テルマ・スキルマギスキル、来たれ雷精、風の精!!」

「リク・ラクラ・ラックライラック、来たれ氷精、闇の精!!」

「【雷の暴風!!】」

「【闇の吹雪!!】」

エヴァとネギの魔法の打ち合いをアスカは近くで見ている。

『わあー。ネギの奴あそこまで手加減されていてそれでも勝てないなんて。』

そうアスカが言った後、エヴァの勝利と言う形で決着が付こうとしている所に学園結界が復活してその効果がエヴァを襲った。

『もうすぐ決着が付こうとしているのに無粋だなあ。』

そう言っアスカはエヴァに手を翳し学園結界の効果を無かった事にした。その結果、ネギは押し負けて負けてしまい、その様子を見ていたアスナも茶々丸に負けてしまった。

「ふはは。私の勝ちのようだな坊や?」

「まっ、まだです。」

ネギがそう言っ立ち上がった所に、エヴァは瞬動でネギの背後に移動し首筋を叩き気絶させた。

「ネギっ！」

「兄貴っ！」

「心配するな気絶させただけだ。つまらない茶番だったが暇潰し程度にはなったよ。」

そう言ってエヴァは茶々丸を引き連れ帰って行った。それと同時にアスカも帰っていった。

## 第27話（後書き）

ああ、戦闘シーンが雑に・・・。

## 第28話

エヴァ達とネギ達の決闘（笑）が行われた次の日、エヴァはアスカの守護騎士達が経営している喫茶店に茶々丸と来ていた。

『それにしても昨日はお疲れ様です。御蔭で面白いものが見れて良い暇潰しになりました。』

「ふん。私の方は暇潰し程度にしかならなかったがな。」

『でしょうね。僕としても驚いてますよ、まさかネギがあんなに弱かったなんて思いませんでした。』

「これなら、そこらの魔法先生と殺り合った方が何倍も面白かったな。」

『ふふふ。そうでうね。・・・あつ、そくだ！エヴァ、君に掛けられている登校地獄の呪いが解けてることに気付いてる？』

「なつ、どういう事だ！」

『昨日の決闘（笑）の最後の方予定より復旧が早かっただろ？それでエヴァが勝って終わるといふ形で決着が付こうとしているのに邪魔が入って勝敗が変わるのが嫌だったから、呪いを僕の方で無かった事にしたんだよ。』

「そうだったのか。・・・って、ちょっと待てアスカ貴様、私の呪いを解けたてことは前から出来たのか?!」

『出来たね、初めて会った時点で僕には解けたよ。』

アスカが事も無げに言うものだから、エヴァは毒気を抜かれ、あすか怒鳴ることができなかった。

「はあ、お前という奴は、この闇の福音を手玉ダイク・エヴァンジェルに取るとは・・・。

『ははは、お褒めに預かり光栄です。』

「誰も褒め取らんわっ。」

そんな感じで話していると店にネギと淫獣を肩に乗せたアスナが入ってきた。

「こんにちはっ、エヴァンジェリンさん。」

「気安く挨拶を交わす仲になった覚えはないぞ。」

「こんにちは、ネギ先生、アスナさん。」

「ふふうーん。聞いたわよお。エヴァンジェリンってネギ達のお父さんのこと好きだったんだってねえ。」

アスナがそう言うと、エヴァはネギに掴み掛り言った。

「き、き、貴様あ、やつぱり私の夢を！！」

『まあまあ、そういきり立つなよエヴァ。』

「アスカ……。」

『それにエヴァがあのかつ親父の事が好きだったなんて今さらだろ？』

「『どういう意味だっ！』」

『さあ、どういう意味だろうねえ。(笑)』

「あ、あのエヴァンジェリンさんっ！父の事で何か知ってることはありませんかっ？！」

「あんっ？なんで貴様にそんな事を言わなければならぬ？」

「良いじゃないエヴァンジェリン教えてくれたっ！」

「ふん。負けたくせに偉そうに。」

『別に教えてあげても良いのでは？』

アスカはそう言った。

「ん、どうしてだ？」

『これ以上五月蠅くして店に迷惑を掛けたくないですから。まあ、エヴァの知ってる手がかりを教えるくらいなら僕にもできますが？』

「どういうことだ？」

『どうもこうも、あなたが教えてくれたことですよ？』

「そうだったか？」

『そうです。』

「アスカに教えたなら教えてくれてもよいでしょっ！」

「ふん。神楽坂アスナ、アスカと坊やとでは決定的に違うことがある。」

「何よ違いつてっ！」

「お前たちは手を抜いてやった私に勝てなかったが、アスカは一人で本気の私と茶々丸に勝ったんだぞ。」

「なっ、それは本当なのアスカっ!？」

エヴァの言葉にネギがアスカに訊いた。

『本当だよ。それなりにマジでやらなきゃ危なかったけどね。』

その言葉を聞いてネギ達は黙り込んだ。

『京都に行くときよいよ。』

「「「えっ?」「」」」

アスカの言葉にネギ達は疑問符をうかべた。

『だから、糞親父の手がかりは京都にあるかもって言ってるんだよっ。』

それを聞いてネギは喜びながら店を出て、アスナと淫獣もそれを追って店を出た。

「騒がしい奴らだ。」

『まあ、良いじゃないですか。それよりお茶を楽しみましょう。』

「ふん。それもそうだな。」

そう言ってアスカとエヴァは店特製のシュークリームやケーキを堪能した。

## 第28話（後書き）

気づいたんです。守護騎士たちの戦闘シーンをまだしてないことに。だから京都編で出せるように頑張ろうと思います。

## 第29話（前書き）

この物語の修学旅行の3 - Aの班割りには、

一班：柿崎、釘宮、桜子、風香、史伽。

二班：古菲、超、楓、葉加瀬、四葉。

三班：朝倉、那波、村上、雪広、ザジ。

四班：明石、和泉、大河内、まき絵、春日。

五班：夕映、アスナ、木乃香、早乙女、宮崎。

六班：茶々丸、刹那、真名、千雨、エヴァ。

です。

では、ネギま<sup>ノットイコール</sup>悪平等を名乗りし夜天の王<sup>ノットイコール</sup>京都編第29話です。

## 第29話

ネギが養親父の手懸りがあるかもしれない場所の情報を手に入れたから、俺とネギは学園長室に呼ばれ、原作通りネギは親書を任せられた。俺も巻き込まれそうだったが異常の絶対交渉を使い何とか大丈夫だったが、ネギが学園長室を出た後、代わりに近衛木乃香の護衛の手伝いを任せられた。その後、歩いているとネギ、アスナ、木乃香の三人に出会い、何故か服を買いに連れて行かれ、原作とは違い、木乃香は仮契約カードに興味を示さず、その代わりに刹那と仲の良い俺に如何すれば刹那と仲良くなれるかを聞いてきた。俺は何故そんな事を聞くのか（原作知識として知っているが）聞き、その理由を聞いた後、木乃香と刹那がもう一度仲良くなれるように似手伝うことを約束した。そして次の日にアスナに誕生日のプレゼントを買いに行き一緒にプレゼントを買い約束をしてその場を後にした。

そして修学旅行当日。

「ふあく。眠い。」

「アスカ眠そうだな。それと括弧が無くてキャラが崩れてるぞ。」

「んっ、んん。ありがとう千雨。気付かなかったよ。」

「おはよう、アスカ、千雨。」

「おはようございます。アスカ先生、千雨さん。」

「『ああ、おはよう。真名、刹那。』」

「それにしても眠そうだね、アスカ？」

『ああ、千雨にも言われた。昨日は夜まで護衛の為の道具を造ってたんだ。』

「それでどんな物ですかアスカ先生？」

『それはですね、これです。』

そう言っ て俺は刹那達に腕輪を見せた。

「これは？」

『これは持ち主が危険になっ たら魔法障壁が張れるという魔法具です。』

「これをどうするんだ？」

『これを刹那が木乃香さんにお守りと言っ て渡してください。』

「わ、私ですか？！むっ、無理ですっ！！！」

『どうしてですか？』

「私の様なものがお嬢様に贈り物など畏れ多いっ！」

『それでは代わりにこの腕輪を付けてください。』

そう言っ て俺は別の腕輪を刹那に差し出した。

「これをですか？」

『効果は後で教えます。僕はこれを木乃香さんに渡してきます。』

それまでに付けて下さい。』

そう言っ て俺は木乃香の所に向かった。

『おはようございます木乃香さん、アスナさん。』

「おはよー、アスカ（アスカ君）。」

『実は木乃香さんに渡したいものが。』

「何々？」

『これです。』

「腕輪？」

『はい、腕輪です。これはただの腕輪ではありません。刹那とおそろいの腕輪です。』

「それほんまなん？！」

『はい。証拠に刹那さんの方を見てください。』

その言葉に木乃香達は刹那の方を見た。

「あつ、本当だ。」

『これは願掛けですよ。』

「願掛け？」

『はい。この腕輪をこの修学旅行中肌身離さず持っていたら仲直りができるっていう感じの願掛けです。』

「なんかうさぐさいわねえ。」

『どうします、いりますか？』

「うん。貰うわ。胡散臭くても良い。」

『じゃあ、あげます。』

そう言っって俺は腕輪を木乃香に渡した。

『それじゃあ。』

「うん。ありがとなあ。」

俺は木乃香達から離れ、刹那達の元に戻り、刹那の方の腕輪の説明をして、時間になったので点呼を取り、新幹線に乗り込んだ。

## 第29話（後書き）

刹那の方の腕輪の効果は、木乃香に危険な目にあっている事を知らせるのと、木乃香の場所を知らせる、自身の周りに簡易障壁を張るです。

## 第30話（前書き）

更新遅くなつてすいません。それとこれから期末考査にはいるのでそのための勉強のためにこれから8月の7日まで考査のために更新が遅くなります。では、ネギまノットイコール悪平等を名乗りし夜天の王王第30話、始まります。

### 第30話

新幹線に乗って暫くして、刹那と一緒にデツキに出て護衛の事について話その後木乃香との仲についても少し話していると2-Aの生徒が乗っている車両から式が親書を銜えてこちらに飛んできたのを刹那が斬り倒して、後から来たネギに意味深な事を言いながら親書を渡しその場を後にした。俺もそれに続いてその場を去り自分の席があるの生徒がいる2-A車両に帰って行った。

「京都よっ、私は帰ってきたあああああ!!」

「テンションたけええ。」

「エヴァンジェリン嬉しそうだな。」

「マスターの元気なお姿。記録、記録。」

「アスカ先生。私はお嬢様の事、見てきます。」

『いつてらあ。』

その後原作通りの嫌がらせがあった。ただ原作と違ったところは2-Aの生徒がお酒に酔ったという事実をネギが隠そうとする前に新田先生たちに報告してバスに運ぶのを手伝ってもらった。ちなみに酒の方はかなり良い地酒だったので回収しておいた。

その後旅館に着き生徒たちの入浴時間が終わったので風呂に行く  
と刹那がいた。

『あつ、刹那。』

「えっ、アツ、アスカ先生、どうして!?!」

『それはこちらのセリフだよ。それより体を隠して。』

「えっ、あつ、きやあつ!?!」

『あぁと、ごめん。それと、その岩陰で覗き見してるやつ出て  
いっしー。』

俺がそう言っていると刹那は刀をいつでも抜刀できるように構えた。

「まっ、まっで。」

そう言っつてネギが淫獣を肩に乗せて出てきた。

「ネギ先生？」

『覗き見とは随分良い趣味をしているんだな。』

「え、違うよ！」

「それより、気おつけてくださいませえ、アスカの旦那。そいつは関西呪術教会のスパイですぜえ!!!」

『はあ。刹那がスパイなわけないだろ。』

「そうです。私は敵ではありません。15番桜咲刹那。一応先生の味方です。」

『それにもしスパイなら麻帆良にいる時にやっちゃてるぞ。』

「私と、アスカ先生は木乃香お嬢様の……」

「きやあー！ー！ー！！！」

「こ、この悲鳴は……」

「木乃香お嬢様っ！」

そう言っつて刹那は女子更衣室に向かい、俺たちもそれについていった。

「ちよっ、下着獲るのやめなさいっ！」

「いやあーん！」

「木乃香お嬢様に何をするっ！」

『刹那、木乃香さんを。』

そう言っつて俺は水遊びで集め刃物の形にして凍る火柱アイスファイアで固めたも

のを持ち、刹那は夕凧を構え低級式神のサルたちに下着をひっぺ替えられている木乃香達を助けようとしたがネギに邪魔された。

「ちよつ、邪魔しないでください。」

『そこをどけ出ないと斬るぞ?』

「だつ、ダメですよサルさんを斬るなんて可哀想ですつ!」

「そのサルは低級の式神で斬つても紙に戻るだけで・・・」

刹那がネギにそう説明している間にサルたちは木乃香を攫い露天風呂の方に逃げた。俺と刹那はネギを除けて木乃香を追い、俺は水遊びで温泉の水を操りサル達の足止めをし、足止めされたサル達から木乃香を奪い返しサル達を斬り裂いた。

「【神鳴流奥義、百烈桜華斬!】」

「なんかようわからんけど、助けてくれたん?ありがとう。」

「えつ、あつ、失礼しますう!!」

そう言つて刹那は露天風呂から逃げつて言った。その後俺は木乃香の話聴きながら湯につかった。そしてネギ達より先に上がり刹那から結界の符を貰い貼りに行った。帰つてくると刹那がネギ達と話していた。

『何を話しているんだ?』

「ああ、ネギ先生が使えないという話をしていたんです。それよリアス力先生、符は貼り終わりましたか?」

『おわつたよ。それとネギが使えないなんて今さらだろ。』

「えつ、どういう事だよアス力!」

『どうもごつも、だから敵が調子にのたんだろ?』

「うつ。」

ネギは俺の言葉に詰まった。その後は原作通りネギが3 - A防衛隊とかいうのを提案したがはっきり言ってネギがいると邪魔にしかならないのでネギには親書の配達があるだろ的な事を言って提案を却下した。それでも諦めきれなかったのか見回りに出て行った。

### 第30話（後書き）

ウォーターコントロール  
水遊び・・・普通の水から血液などのありとあらゆる水分を操ることが出来る。また水の上を歩くこともできるスキル。

### 第31話

原作通り近衛木乃香が攫われた。俺はその時、護衛を刹那に一旦任せ、原作で襲われる3日目の

映画村に忍び込んで認識阻害の術式を書き込んで映画村で多少の魔法を使っても不思議に思われ

ないようにした。作業が終わった直後に刹那からの連絡を受け木乃香が攫われたことを知った。

俺はすぐに刹那達の所に向かうと、刹那達は苦戦していた。俺はシユベルトクロイツを剣の形に

して刹那と戦っている月詠に斬りかかった。

『斬り捨てえ、ゴメンっ!!』

俺の剣は簡単に避けられてしまった。そして俺の登場に刹那達や千草は驚いていた。

「なんどすかつ!」

「危ないですな〜〜。」

「アスカ先生!」

「アスカっ!」

『近衛木乃香は返して貰うよっ。』

そう言って俺は知られざる英雄でその場にいた者たちの前から消え

ミスターアンノウン

、瞬動で千草の下に行き、知られざる英雄を解く瞬間に木乃香を奪い  
そのまま千草と距離を取った。

「なっ、どうやってっ!？」

『教えないよ。まあとにかく捕まってるっ!』

そうやって俺は一髪々の黄昏へトリック オア トリートメント  
で髪を伸ばし千草を拘束しようとした。

「【障壁突破、石の槍!】」

鋭い石が地面から出てアスカの髪に行く手を阻んだ。

「千草さん、ここは一旦引くよ。」

『お前はアイツの人形。どうしてこんな所にいる?』

「へえ、君はあの方の事を知っているみたいだね、どうしてだ  
い?」

フェイトの問いに俺はフェイトの近くまで移動しフェイトにだけ  
聞こえる様に言った。

『それが知りたいなら連絡用の魔法具を渡しておくよ。』

そうやって俺はフェイトに威力を殺して一撃を入れ、それと同時  
にフェイトのポケットの中に

連絡用の魔法具を入れた。

「新入りっ!」

「くっ、千草さん逃げるよ。」

そう言ってフェイトは千草と月詠を連れ水の転移魔法を使った。

『ちっ、逃げられたか。』

「お嬢様っ！」

「木乃香（さん）！」「」

俺がフェイトたちが転移魔法を使った場所を見ながらそう言つと、刹那達が駆け寄つてきた。

『刹那、木乃香にちゃんと服着せとけ。』

「わかりました。」

そう言つて刹那は反脱ぎの木乃香の浴衣を直し、俺が渡した羽織を木乃香に着せた。その後木乃香が目をさまし原作通りのやり取りがあつた。

### 第31話（後書き）

大学のテストがヤバいので来週からテスト勉強などをする為更新が止まります。更新停止の間だけ暇潰しで書いたものを閲覧できるようにしていきますので良かったらそちらの方も読んでみてください。

更新再開は8月の6、7の初めの土日間に出来たります。

## 閑話2（前書き）

英語のテストの出来が悪くその事から現実逃避するために書きました。よってかなりの駄文です。ですからもしかしたら書き直したりなんなりするかも知れません。それでもよろしければどうぞ。

## 閑話 2

俺と造物主ライフメーカーの出会いのきっかけを話そう。

それはまだ俺こと、アスカ・スプリングフィールドがメルディアナ魔法学校にいた時のこと。

「ああ、タイムマシンとかでも作ろうかなあ？」

「いきなり如何したのですか、主アスカ？」

「いやさあ、さつき日本の漫画とかアニメとか色々見ててさあ、ネタ技とかそういうのをやってみたくなってるさ。」

「でもどうしてタイムマシンなんですか、アスカちゃん。」

「ん、ああ、いや別にタイムマシンでなきゃいけないわけじゃないんだ。ただ空想の話とかで魔法とかを使っても出来なさそうでもちやんと設備とか理論とかそういったものを用意して研究すればできそうなのがタイムマシンってだけで、その理由で行くとアスラクラインの鋼みたいな空間制御でもいいんだけどね。」

と俺は長々と理由を話した。

「設備の用意と理論とかの構築は出来ているのですか？」

「うん。そういう設備は女神印の別荘の中に揃っているし、理論は夜天の書や別荘の書庫にあるのを使うから。」

「なるほど。」

「というわけでみんなも手伝ってね。」

「「「「「「御意。「「「「「」

こうして俺は別荘で研究を始めた。

「出来たあつー!」

「へえ、それがタイムマシンなのかアスカ？」  
「そうだよヴィータ。」

そうやって俺は盾形の見た目のイメージとしてはまどかマジカの  
暁美ほむらの使っていたモノを模したのを見せながら言った。

「それで過去に行けたりするですかあ？」  
「そうだよツヴァイ。理論上ではね。」

そういつて話しているといきなりタイムマシンが起動した。

「なっ、なんだ?!」

「これって、まさか発動してるのっ?!」

「兎に角どうなるかわからないから皆を一回夜天の書に戻すぞっ  
!」

そうやって俺は皆を夜天の書に戻し、タイムトラベルに備え、俺  
はタイムスリップした。

俺は瞑っていた眼を開けるとそこは知らない場所だった。

「くっ、ここは何処だっ？」

<それは私が答えよう。>

「誰だっ！」

<私はそなたを転生させた女神だ。>

「ああ、駄女神か。」

<だれが駄女神よっ!>

「お前だよ。・・・それでこれはどっいつ事なんだ?」

<それは・・・御免なさいっ!>

「如何して謝る?」

<それは・・・>

駄女神は理由を話し始めた。

「つまりなんだ。お前が俺の作ったタイムマシンに加護でも付けようとしたら手元が狂っちゃって、そのせいでタイムマシンが暴走して俺らは過去に飛ばされたと。」

<ええ、ちなみにその世界はあなたが生きていた時代より千年以上前の次代よ。>

「ふ、ふ、ふざけんじゃねええ!!!」

<ひゃっ!>

「どうしたら帰れるっ!」

俺がそう聞くと駄女神は話した。

「つまりあんたが造物主の持つている創造主の掟と対になる様に造った、黄昏を迎える掟っていうのエネルギーを俺の作ったタイムマシンへ注げば良いんだな?」

<ええ、そうよ。黄昏を迎える掟にはタイムマシンの様に時間を行き来する力はないからね。だから帰るのならちゃんとタイムマシンの術式を書き換えといてね。>

俺は駄女神に黄昏を迎える掟の在りかを訊いて探しに出た。

目的の物は半年ぐらいで見つかり、見つかった後は暫く観光をした。その時に造物主に出合った。ちなみに造物主は女性だった。造物主と仲良くなってからは暫く一緒に暮らしたり、アーウェルンクスシリーズを造ったり、真祖の吸血鬼にする術式を研究したりと一緒に色々な事をした。

そしてエヴァが吸血鬼化される前に俺は造物主や俺と造物主の子供に近い存在であるアーウェルンクスシリーズ達に別れを告げ俺は元いた時代に帰った。

## 閑話2（後書き）

造物主との接点を無理やりですが書いてみました。ちなみにアスカライフメーカーの夜天の書には造物主と研究した吸血鬼化の術式がちゃんと記述されています。

### 第32話（前書き）

テストも終わりましたのでまた更新を始めます。ただ、再試が3教科位あるのでその勉強の為にこれから更新が遅かったり、内容が短かったりします。

ではネギま<sup>ノットイコール</sup>悪平等を名乗りし夜天の王<sup>ノットイコール</sup>第32話、始まります。

### 第32話

修学旅行2日目。原作通りに朝から2-Aの生徒はテンションが高く、木乃香も昨日の事を切っ掛けとして刹那と仲直りをしようと朝食を持ちながら刹那と追いかけてっこをしていた。俺は大惨事に成る前に刹那と木乃香を止め一緒に俺の近くの席に着かせ、朝食を食べさせた。

その後は原作通りにネギがどこの班に着いて行くかという取り合いが始まった。俺はすぐに千雨たち6班に誘われたのと、昨日の襲撃後にフェイトに渡しておいた魔法具でフェイトから会って話したいと連絡があったので途中で抜けても大丈夫な様に千雨達と行動することにした。

俺はタイミングを見計らって人型と入れ替わり、フェイトに会いに行った。

『やあ、待たせたかな?』

「いや、僕も今来たところさ。それで、どうして知っているか教えてくれるんだろ?」

『そうせかすなよ。』

そう言って俺はフェイトにどうして俺が造物主ライフメーカーの事を知っているのかを話した。

「なるほど、つまり君は一応僕達の父になるのかな?」

『さあ、どうだろうか?』

「それで僕は君をお父さんとも呼べばいいのかな?」

『いや、アスカでいいよ。』

「そうかい。わかったよ。」

『話すべき事は話したし僕は戻るよ。』

そう言つて帰るうとする俺をフェイトが引き留めた。

「聞かないのかい？ 僕が、いや、僕達が近衛木乃香を狙つて何を  
するのか。」

『別に聞かないよ。でも、二つ頼みごとをしても良いかな？』

「なんだい？」

『一つ目は僕の事はデユナミスと造物主ライフメーカー以外には僕の事を教えな  
いでくれないかな。』

「どうしてかな？」

『如何してかは教えられないけど万が一のためだよ。』

「わかったよ。それで二つ目は？」

『この手紙をデユナミスに渡してほしい。』

そう言つて俺は手紙をフェイトに渡した。

「これを渡せば良いんだね。」

『ああ。それじゃあ、またね。』

そう言つて俺はフェイトと別れ、千雨達の所にタイミングを計つ  
て人型と入れ替わり戻った。その後は皆で観光して宿に戻った。

### 第33話（前書き）

遅くなって申し訳ありません。では、ネギまノットイコール悪平等を名乗りし  
夜天の王へ第33話始まります。

### 第33話

俺がフェイトに接触した後、俺は千雨達と合流した。ネギは原作通りに宮崎のどかに告白され、心ここにあらずといった感じでポロっとしていた。その日宿に帰ってネギは朝倉と混浴したり、魔法がバレたりしていた。

「ええ〜っ、あの朝倉に魔法がバレたあつ〜!!」

「は、はい。」

「ちよつと、あの朝倉にバレたってことは世界中にバレたのと同じことなのよっ〜!!」

「そ、そんなあ〜っ!!」

「もお、おしまいね。あんたのことは世界中にバレてアンタはオコジョにされて強制送還されるは。」

「さようならネギ先生。」

『僕に迷惑かけないようにオコジョにされて強制送還されてこれからの人生頑張れよ。』

「そ、そんなあ、一緒に弁護してくださいよ、アスナさん、刹那さん、アスカ。」

そう言っつてネギが泣き付いているときに、朝倉がこちらに来了。

「おーい、ネギ先生。」

「ここにいたんですか兄貴。」

「あ、朝倉さんっ!!」

「ちよつと、朝倉、子供を虐めてるんじゃないわよっ〜!!」

「イジメ?何言ってるの??」

「そうだぜ、ブンヤの姉さんは俺らの味方なんだぜ!」

「み、味方?」

「そう、私、情報部突撃班、朝倉和美はカモつちの熱意にほだされて、ネギ先生の秘密を守るエージェントとして、協力するにしましたのさ。」

「ええ、ホントですかあっ!」

「ホント、ホント、証拠にはいコレ、今まで集めた証拠写真。」

そう言っつて朝倉はネギに証拠の写真だけを渡した。

「わあー、ありがとうございます。」

「よかったわね、ネギ。」

『それにしてもよかったですね朝倉さん。』

「どういうことアスカ君?」

喜んでいるネギをはしに見ながら俺は呟き、その呟きに朝倉が反応して、聞き返してきた。俺は朝倉にネギの秘密をバラしていたらどうなっていたかを教えて、さらに俺が朝倉を消すつもりだったとそれが当然だというような顔で言った。

「えっ、それってマジ、冗談じゃなくて?!」

『本気ですよ。そうしなきゃ僕が危ないじゃないですか。それに僕がしなくても麻帆良に帰ればどのみち消されますし。』

「ホントに?!」

『ホントにホント。だからばらさなくてよかったですね。僕も元同級生を殺したくないですから。』

俺はそう言っつて近くに新田先生たちの気配を感じたのでそこから離れた。

そこから原作通りなんやかんやあつて朝倉と淫獣による、「くちびる争奪!」修学旅行でネギ先生&アスカ先生、ラブラブキッス大

作戦？」が始まった。

1班代表選手：史伽&風香。

「お、お姉ちゃん正座は嫌ですう。」

「大丈夫だよ、僕達には楓姉に教わった忍術があるんだからっ！」

2班代表選手：楓&古菲。

「アスカ先生に一手手合わせを頼むアル。」

「んー？」

3班代表選手：いいんちよう&那波。

「ネギ先生の唇絶対に死守ですわっ！」

「あらあら、なら私はアスカ先生にしようかな？」

4班代表選手：まき絵&裕奈。

「エへへー、ネギ君とキスかあ？」

「絶対に勝あつ！」

5班代表選手：のどか&夕映。

「頑張るですよ、のどか。」

「う、うん、頑張るよ夕映っ！」

原作通りに6班は不参加だった。そして朝倉と淫獣主催のゲームが幕を開けた。

### 第34話

朝倉は淫獣の企みに乗っかり色々手回しをして旅館に泊まっている他の客が寝静まった頃、企画を始めた。

「修学旅行、特別企画！！くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生 & アスカ先生、ラブラブキッス大作戦？〜開始い〜！！」

朝倉がそう宣言し参加者は行動を開始した。ちなみに六班の人間は朝倉が参加を聞きに来た後アスカに連絡しアスカから五班に賭けるように言われトトカルチョにはちゃっかり参加した。

「現在、二班、三班、四班が急速に接近中！早くも大乱戦の予感だあ！」

そんな解説を朝倉がしていると、三班と四班が曲がり角で出会い戦闘が開始した。

「っ！いいんちよ！？」

「まき絵さん、勝負ですわっ！」

そうして雪広とまき絵はお互いの枕を顔に受けしやがみこみ、その隙に裕奈が那波を攻撃しようとするが、那波はそれを笑顔で躲した。そうすると古菲が階段から蹴りを雪広と裕奈に放った。那波は裕奈が丁度盾がわりになり蹴りを受ける事はなかった。

「開始そうそうに三つ巴の大乱闘が始まったあっ！武闘派古菲選手が優性なのかあーっ、だが古菲選手枕を使わない打撃は反則だぞおっ！！！」

「くっ！那波さんっ、援護をつ！・・・っていないい？！」

「ごめんね、あやか。これも戦いだから。」

そう言っただけで那波は戦闘をしている雪広達を置いて、古菲達が出た階段を登って移動した。しばらく戦闘をしているとアスカと新田先生の話し声が聞こえ、その声が聞こえると雪広達は戦闘を止め、楓と古菲は一目散に逃げその時、古菲の体が裕奈に当たり、裕奈は怯んだ。そんな裕奈をほって、雪広とまき絵は逃げ、裕奈はアスカと別れ見回りをしていた新田先生に捕まった。その様子を見ていた雪広とまき絵は裕奈を見捨て、同盟を組んだ。

「ゆ、ゆえ、何でネギ先生の所に行くのにこんなところを通るの。」

「このルートなら誰にも見つからずにネギ先生の所に行けるからです。」

5班は原作通りに図書館部の機動力を活かしたルート選択でネギの所まで向かったが、部屋の前で1班に遭遇した。

「あつ、5班!」

「やるよ、史伽!」

「鳴滝忍法、影分身の術!」

「別に分身してないです。」

「甲賀しゅ・・・フゲラッ!」

史伽は夕映の投げた枕に当たった。

「史伽さん、風香さん、ここからは私が相手です。」

「何お、ゆえ吉、我ら甲賀忍軍に勝てると思ってかあ!」

「お、思ってたかあ・・・でゴザル。」

そう言っている二人を夕映は容赦なく枕で叩き、反則ギリギリ、イヤ、ほぼ反則な本での攻撃で2対1の攻防を繰り広げていた。

「の、のどか！ここは私に任せて早くその扉から中へっ！！」

夕映の言葉に押され中に入ったのどかは、原作通りにネギの偽物にキスをしようとしたが、他の偽物に吃驚して叫び気絶し、偽ネギ達は窓から外に出ていった。のどかの叫び声を聞いて夕映達はネギの部屋に入ったがそこには気絶したのどかと、開けっ放しの窓だけだった。5班以外は直ぐ様ネギを探しに行った。

「のどか選手、ネギ先生とのキスに失敗したようだ！そしてネギ先生は逃走し、各オツズは変わらず！」

「朝倉の姉さん。俺っちの目の錯覚かもしれねえが、ネギの兄貴が5人いるように見えるんだが？」

朝倉はカモが見ていたパソコンを覗くとそこにはネギが5人いた。

「なっ、これはどういうことだあっ！ネギ先生が5人いるぞお！  
！・・・そしてそうこうしている間に5人いるネギ先生の告白タイムだあっ！！」

ネギの偽者は原作通りに動き各班をロビーの方に向かった。そこからの出来事はほぼ原作通りに終わったのだった。

原作と少し違ったのは那波だった。彼女は運良く新田や他の見回りの先生のいない所を歩いてアスカを探していた。それは物凄い運の良さで、解説の朝倉や見ていた3-Aの人間が「桜子大明神が乗

り移った。」と言わしめるほどの運の良さだった。その運の良さをもっとしてもアスカは見つからなかった。それもそのはず、アスカはコツソリ抜け出し、八ッ橋を買いに行っていた。だが桜子大明神が乗り移ったと言われるほどの運を發揮した那波は、裏から買えてってきたアスカと遭遇した。

「アスカ先生、見回りせずこんな所で何をやっているんですか？」

「千鶴さんですか、あー、それは、ちょっと八ッ橋を買いに。」

「そうですか。・・・アスカ先生。この事は新田先生に黙っているので代わりに私のお願いを聞いてくれませんか？」

「そうですねえ、僕のできる範囲でなら。」

「それなら簡単です。私とキスしてくれませんか？」

アスカは予想外の事にビックリした。

「キ、キスですか？」

「ええ、勿論、唇と唇で。」

「そ、それ以外には・・・。」

「無理です。」

そう那波はとてもイイ笑顔で言った。

「こ、こうなればっ！逃げるが勝ちっ！！」

「逃がしませんよ。」

そう言って逃げようとするアスカは那波に肩を捕まれ捕まった。

「えっ、ちょ、離してくださいよ千鶴さん?!.....っというか、拘束が解けないっ!！」

アスカは千鶴の拘束から逃れようとしたが、アスカが遊びで造ったスキルの一つ、フラッガーが自動で発動し、その効果でアスカは千鶴の拘束から逃れられなかった。

『えっと、アレだね。ここで、「なーんて嘘ですよ。」って言うんですよね?! ねっ、そうだと言って下さいよ!』

アスカはそう言って懇願するような目で千鶴を見つめたが、千鶴は笑顔で言った。

「言いませんよ。だから、失礼します。」

そう言っつて千鶴はアスカにキスをした。それは丁度、事故でのかとネギがキスした瞬間と同じだった。そしてそれと同時に朝倉が企画の終了を告げた。

「優勝はあつ、宮崎のどかと那波千鶴だあつ!」

そうしてその後は、千鶴とアスカ以外の参加者は原作通り新田先生によって朝までロビーで正座させられた。

### 第34話（後書き）

スキル：フラッグー

効果：死亡フラッグ以外のフラッグをたてるスキルで、普段は無効脛ライフゼロで無効化しているが、たまにその無効化を超える事もある。特に女性関係のフラッグがたやすい。どちらかというと過負荷よりのスキル。

てなわけで、第34話でしたが、何か色々適当になってしまった感じがありますが……。まあ、ですがこうして無理やりですがやっと千鶴を魔法側に引き込む切欠をつくりました。

それと前に頂いた感想で、亜子や楓、アキラもアス力側に入れてくれとありましたが多分無理っばいです。最大の理由としては、既に人数が多すぎて守護騎士達が殆ど活躍どころか出てきたりしていません。ですので、亜子や楓、アキラを入れてくれと言っていただいた方達には申し訳ありませんが多分、亜子やアキラは殆ど絡むことなく、魔法世界編で身を守る為にアス力と仮契約するぐらいになると思います。

では、次回の更新まで！

### 第35話（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。再試に向けての勉強と再試があったのと、内容が浮かばなかったのが合わさり更新が遅れました。

### 第35話

朝倉と淫獣主催の企画が参加者1名を除いた全員の正座という最後を迎えた次の日。

「ちよっ、こんなにカード増やしてどうするのっ！」

「えっ、僕のせいですかあっ！」

「そうよっ！どう責任取るつもり！」

「そう怒らないでくださいよ、姐さん。」

「そうだよアスナ。儲かったんだし良いじゃん。」

『何が良かったのかな？』

その場に居た、アスナ、刹那、ネギ、朝倉、淫獣は声のする方向くと、そこにはアスカがこちらに向かってきていた。

「「げっ！」」

「「「アスカ（アスカ先生）！」」」

『やあ、皆さんお揃いで。淫獣、昨日のパクティオーのマスターカードを貰いに来たぞ。』

「へ、へい。アスカの旦那。こちらになります。」

そう言っつて淫獣はアスカにマスターカードを渡した。

「あ、アスカもやっちゃたの!？」

『ええ、事故ですが千鶴さんと。』

「それで、ネギとアスカはどうするつもりなのよ？」

「えっと……。」

『僕の方は出来るだけ危険の無い様につきもりですよ。』

「ちやんと考えてるんだ。」

『まあ、これぐらいは当たり前ですよ。．．．それと兄さん。僕は基本アナタが一般人に魔法バレしたり、一般人を巻き込んだりしても助けませんから。好きにしてください。』

そう言っつてアスカはその場から去っていった。残されたネギ達はその後は原作通り宮崎を巻き込まないと決めたり、アスナにコピーのカードを渡し、アーティファクトの出し戻しの確認をした。

アスカは淫獣からパクティオーのマスターカードを貰った後、6班の部屋に向かっていた。

「あ、アスカ先生おはようございます。」

『ああ、千鶴おはよう。』

「昨日はごめんなさい。無理やりキスしてしまつて。」

そう言っつて千鶴は頭を下げた。

『頭を上げてください。昨日の事は気にしていませんから。』

「ほんとに?」

『ええ。むしろ無理やりキスされる程、好いてくれて嬉しかったですよ。』

アスカがそう言っつと千鶴は顔を赤くした。

「おい、アスカ。」

『ん?ああ、千雨どうしたの?』

アスカが向かおうとしていた方向から千雨が歩いてきた。

「いや、お前が遅いから迎えにきたんだよ。」

『ありがとう。では千鶴さんまた後で。』

そう言ってアスカは千雨を連れて6班の部屋に行った。

6班全員に5班というか、近衛木乃香の行く場所に着いていく事を了承してもらい、アスカ達は木乃香達と行動を共にしていた。

「ホントにアイツ等は元気良いな。」

「千雨、何か言ってることが年寄り臭いぞ？」

「真名、言わないでくれ。私もそう思ったから。」

「ああ、マスターが楽しそうにゲームをつ！記録、記録。」

『千雨、真名。こっちにあるシューティングゲームしないか？』

ゲーセンではしゃいでいる5班+エヴァを千雨達は見ていた。

アスカはそんな二人を見て言った。

「ふむ。どうする？」

「やってみるか。」

「じゃあ、勝負しようじゃないか。」

「勝負？」

「そうだ。ルールはいつたてシンプル。どちらが多く敵を倒し高スコアをとるか。それにただの勝負じゃつまらないから景品を用意しよう。景品はそうだなあ・・・アスカにお願いを一つ聞いて貰えるにしよう。」

『ええ、俺えっ！』

「分かった。その勝負受けるぞ。」

『ちよっ、俺の意思は無視ですか！』

「なあにそんな滅茶苦茶な事は頼まないさ。アスカの出来る範囲のお願いに限定する。」

「そうだぞ。私たちにもそれくらいの常識はある。」

『わかったよ。でも俺ができないことはやらないからな。』

「ああ、わかってるさ。」

「じゃあ、始めようぜ。」

そう言っつて二人は銃をとってゲームを始めた。

「おい！あつちに何か凄いスコアをたたき出してる奴らがいるらしいぞ！」

「マジで！」

「ああ、しかもワンコインであのクリア出来た奴が滅多にいないクソゲーでだつてさ！」

「あのクソゲーでっ！」

「これは見に行くべきだろ！」

「ああ！」

そんな感じのやり取りがされるぐらいに二人の勝負は続いていた。二人がやっているゲームはワンコインでクリア出来る人間がごくわずかしかなかった。それも「麻帆良でも超人的な感覚が無ければクリア出来ないのでは？」とか「何でこんなゲームが無くならず存在するんだ？！」と良く言われ、ネットの”世界ゲーセンランキング、難易度の高いクソゲー部門第一位”になる程の超難易度の高いシューティングゲームだった。

二人の勝負は、千雨が僅差で真名に負けていて、それが徐々に差が広がっていて、そうならないように千雨が何とか食いついている状態だった。

「粘るな千雨。」

「はん。アスカがかかっているんだ負けられるかよ真名。」（バンッ！）

「ふむ。その心意気は買うが、何事にも諦めは大切だろ？」（バ

ンツ！、バンツ！

「生憎、私は諦めが悪い方だなっ！」（バンツ！、バンツ！、バンツ！）

「なら、私に着いてこれるかな？」（バンツ！、バンツ！、バンツ！）

「追い越してやるっ！」（バンツ！、バンツ！、バンツ！）

そうして二人のスピードも上がり、二人ともクリアした。スコアは、真名が歴代1位、千雨が真名には及ばなかったが2位という結果に終わった。

第35話(後書き)

### 第36話（前書き）

書きたいのに体が（あと精神的にも）怠くて書けないという中で  
頑張りました。ではネギま<sup>ノットイコール</sup>悪平等を名乗りし夜天の王<sup>ノットイコール</sup>第36話  
です。

### 第36話

真名と千雨のシューティング勝負で出来た人の集りを利用してネギと明日菜は班をコッソリ抜け出した。のどかはそんな二人を追って行った。

勝負終了後、5班の残ったメンバーと6班のメンバーで街を散策を始めた。暫くすると、刹那は刺客の気配を察知して、木乃香の手をつかみ、走り出した。6班は刹那達が走り出したのを見ていたが、普通に歩いていた。

刹那と木乃香めがけて飛針が飛んできたが、刹那はそれを全てつかみ取った。

「ちよつ、桜咲さん。いきなり走り出してどうしたの!？」

「それに速いです。」

ハルナや夕映の声を無視して、刹那は刺客からの攻撃から木乃香を守る事に集中していた。

「あれ、ここシマネ村じゃん。桜咲さんここに来たかったの?」

「すいません。綾瀬さん、早乙女さん。わ、私、木乃香さんとふ二人つきりになりたいので、ここで別れましょう。」

「……えっ!?!」「」

「では、お嬢様失礼します。」

「ふえ?・・・ひゃっ!」

そう言っただけ刹那は木乃香をお姫様抱っこをして、入場料を払わずに塀を越えて中に入った。

シマネ村の中に入った二人は、原作通りにコスプレをしていた。そんな二人の前に馬車が止まり、ゴスロリ風の服を着た月詠が現れた。

「どうも、神鳴流です〜。じゃ無かったです。・・・その東の洋館のお金持ちの貴婦人にございます。そこな剣士さん。借金のカタにお姫様を貰い受けに来ましたえ〜。」

「な・・・何？な、何のつもりだ、こんな場所で！」

「せつちゃん、これ、劇や劇。お芝居や。」

「ふふふ。さあ、早くお姫様を渡しなはれ。」

「そうはさせんぞ。木乃香お嬢様は私が守る！」

「キヤー！せつちゃん、格好えー？」

「わっ！お、お嬢様いけません！」

「そーおすかー。ほな仕方ありまへんなー。・・・えーい？」

そう言っつて月詠は手袋を刹那に投げた。だが刹那に届く前にその手袋は別の人間に取られてしまった。

『だめですよ。お姫様の護衛の剣士とやる前に、私として貰わなければ。』

「アスカ先生！」

手袋を取った人間は、真庭鳳凰のコスプレをしたアスカだった。

この衣装は何故か貸出の衣装の中に普通にあつた。

『やっと追いつきましたよ。木乃香さん、刹那さん。』

「あんさんは、誰どすかー？」

『これはこれは申し遅れた、貴婦人殿。我はお姫様と剣士のお目付け役の忍だ。』

「そのお目付役の忍が何のようですか？」

『用も何も。お姫様をかけた決闘を我とやっってもらいたいだけだ。』

そうアスカが括弧を外さず、真庭鳳凰の喋り方という変な話し方で言うと刹那が周りに聞こえないように小さくアスカに言った。

「アスカ先生。どういことですか？」

『ふむ。どうもこうも、お前は木乃香の護衛だろ。なら我が決闘をして時間を稼いだほうが良いだろ？』

「分かりました。アスカ先生お願いします。」

刹那はアスカの言葉に従った。

「ふふふ。ウチはあんさんでも構いませんよ。ウチと手合わせしてもらえるのなら。」

『なら決まりだな。』

「では、30分後、場所はシネマ村正門横”日本橋”にてお待ちしております。逃げないで刹那センパイ達もちゃんと来て下さいね。」

そう言って月詠は馬車に乗って去っていった。

30分後、アスカ達は指定の場所に來ていた。

「ふふふふ、来てくれはりましたか。」

「せ、せつちゃん。」

「大丈夫ですよ、木乃香お嬢様。」

『この決闘は我が引き受ける。刹那達は戦闘が始まればこの場から離れている。』

「お願いしますアスカ先生。」

そんなやり取りをしていると人が集まってきた。

『ふむ。月詠とやら、この者達は。』

「心得てます〜。この方達は私の集めた可愛いペット達がお相手します。・・・ひゃっきゃこおー？」

そう言って大量の符をばらまき、式を召喚した。

「それじゃあ、始めましょうか。」

『そうだな。・・・では刹那、安全な場所へ逃げるのだぞ。』

「はい。」

月詠は抜刀してアスカに突っ込んできた。

「にとーれんげぎざんてつせーん？」

『いきなりだな。』

そう言ってアスカは月詠の攻撃を暗器でしのいでいた。

「暗器ですか？やりますなあ。刹那センパイと戦えへんかったけ

ど、あんさんとの戦いも面白いですなあ。」

『そうか。これはどうだ。【一揆刀銭】』

アスカは月詠から少し距離をとり、暗器で毒刀・鍔を取り出し居合い抜きを月詠に放った。月詠はアスカの居合抜きを自分の刀で受け止めた。

「ふふふ。居合抜きですか〜。」

『流石というべきか。これを受け止めるとは。』

「まだまだ、こんなものじゃくはないですよね〜。」

『おぬしこそ。』

そうして月詠とアスカは殺陣を始めた。お互いの攻撃は、お互いの服を切るか薄皮を切る程度のものでお互いにけつていだに欠けるものだった。

そんな状況が暫く続いたが、それも少し離れた城の天辺で刹那と木乃香が天ヶ崎千草とその式、そしてフェイトに追い詰められていた。

「よそ見はあきませんな〜。」

『ちつ！【破魔・竜王刃！】』

月詠はアスカが刹那達に気をとられている時に刀を振るったがアスカは何とかそれを防いで跳ね除け距離を取り、アスカは月詠に対して、剣戟を飛ばした。アスカは月詠が破魔・竜王刃を対処している隙に離れた。

そして原作通り肩を射られ、木乃香の力で治った刹那の下に行き、何故か持っていた煙玉を使って、周りを煙で被い、その隙に刹那と木乃香を腕を掴み、アリバイプロック腑罪証明でその場から離れ、更衣室近くまで移動し、着替えてから木乃香の実家に向かった。

ちなみにこの一連の騒ぎをエヴァ、茶々丸、千雨は見物しながらお茶や和菓子を堪能していた。アスカ達が居なくなつた後は適当にそこらをぶらつき、旅館に帰った。

### 第36話（後書き）

見稽古・・・創造スキルメーカー幻想で造ったスキル。能力はほぼ刀語の鑢七実の見稽古と同じ。

ソードマスター 剣技修得・・・剣術の才能が上がり、剣術を覚えるのが上手くなるスキル。見稽古と完成とシ・エンド一緒に使えば、漫画の技だろうが何だろうが剣の技なら何でも習得できる。また、おまけとしてナイフを使った戦闘も同じように覚えることが出来る。

今回アスカが使った技は上記のスキルを使い覚えた技です。

次回はもっと早く投稿出来る様に頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4078t/>

---

ネギま～悪平等《ノットイコール》を名乗りし夜天の王～

2011年9月29日14時35分発行